

第18回鞠智城シンポジウム

大宰府と 古代山城・鞠智城

令和6年10月27日(日)

12:30～16:30(受付:開場12:00～)

会場:九州国立博物館1階ミュージアムホール

主催:熊本県、熊本県教育委員会、九州国立博物館

共催:明治大学国際日本古代学研究クラスター

後援:文化庁、駐福岡大韓民国総領事館、熊本県文化財保護協会、菊池市教育委員会

山鹿市教育委員会、菊池川流域古代文化研究会、肥後古代の森協議会

明治大学研究・知的戦略機構、西日本新聞社、NHK熊本放送局、NHK福岡放送局、熊本放送、エフエム熊本



第18回鞠智城福岡シンポジウム

「大宰府と古代山城・鞠智城」

日時：令和6年10月27日（日）

12：30～16：30（受付・開場12：00～）

会場：九州国立博物館1階ミュージアムホール

主催：熊本県、熊本県教育委員会、九州国立博物館

共催：明治大学国際日本古代学研究クラスター

後援：文化庁、駐福岡大韓民国総領事館、熊本県文化財保護協会、菊池市教育委員会

山鹿市教育委員会、菊池川流域古代文化研究会、肥後古代の森協議会

明治大学研究・知的戦略機構、西日本新聞社、NHK熊本放送局、NHK福岡放送局

熊本放送、エフエム熊本

～日程～

- | | |
|-------------|--|
| 12:00 | 開場 鞠智城映像上映 |
| 12:30～12:45 | ころう君ステージ |
| 12:45～13:00 | 開会
主催者挨拶 熊本県・九州国立博物館
共催者挨拶 明治大学国際日本古代学研究クラスター
(来賓紹介) |
| 13:00～13:50 | 基調講演「大宰府と古代山城・鞠智城」
小田富士雄（福岡大学名誉教授・前鞠智城跡保存整備検討委員会委員長） |
| 13:50～14:05 | 休憩 |
| 14:05～14:25 | 報告者①「鞠智城の調査・研究と成果」
長谷部善一（熊本県教育委員会 歴史公園鞠智城・温故創生館長） |
| 14:25～15:05 | 報告者②「筑紫大宰の備え」
小嶋篤（九州歴史資料館 技術主査） |
| 15:05～15:20 | 休憩 |
| 15:20～16:30 | シンポジウム
コーディネーター 佐藤信氏（くまもと文学・歴史館長・東京大学名誉教授）
コメンテーター 吉村武彦（明治大学名誉教授）
パネリスト 講演者1人、報告者2人 |
| 16:30～ | 閉会 |

令和6年度(2024年度)鞠智城シンポジウム 講師等一覧

【報告・パネリスト】

○小田 富士雄 (おだ ふじお)

福岡大学名誉教授、前鞠智城保存整備検討委員会委員長。専門は考古学、日本古代史(先史時代・古代・日韓交渉史)。博士(文学)。

九州大学大学院文学部博士課程中退。九州大学文学部助手、別府大学文学部助教授、北九州市立考古博物館館長、福岡大学文学部教授を歴任。

著書に『九州考古学研究』5巻 学生社、『九州古代文化の形成』上・下巻 学生社、『日韓交渉の考古学・弥生時代篇』(編・共著)六興出版、『百済熊津・酒池期の都城制と倭』『古文化談叢』第49集 九州古文化研究会、『筑紫観世音寺創建年代考』『古文化談叢』第55集 九州古文化研究会ほか。

令和4年度熊本県教育委員会より「熊本県文化財功労者」を贈呈。

○小嶋 篤 (こじま あつし)

九州歴史資料館 学芸員(技術主査)。専門は日本考古学。博士(文学)。

平成21年7月福岡県教育庁に入庁。九州歴史資料館、九州国立博物館研究員を経て、令和3年4月より現職。

著書に『大宰府史跡指定100年と研究の歩み』(編著)九州国立博物館、『大宰府学研究』(編著)九州国立博物館、『筑紫の神と仏』(編著)九州国立博物館、『筑紫君一族史』(編著)九州歴史資料館ほか。

○長谷部 善一 (はせべ よしかず)

熊本県立装飾古墳館分館 歴史公園鞠智城・温故創生館 館長。専門は日本考古学(古墳時代)。学芸員。

平成3年4月熊本県教育庁に入庁。文化課、装飾古墳館、岩手県教育委員会(併任)文化庁(研修派遣)等を経て、令和4年4月より現職。

著書に『古代たたら製鉄 復原の記録』(編著)熊本県立装飾古墳館、『中国・四国地方の装飾古墳』(編著)熊本県立装飾古墳館、『龍門寺原遺跡』熊本県教育委員会ほか。

○コーディネーター：佐藤 信 (さとう まこと)

東京大学名誉教授、くまもと文学・歴史館 館長、横浜歴史博物館 館長。専門は日本古代史。博士(文学)。

東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退。奈良国立文化財研究所(平城京跡調査部)研究員、文化庁文化財調査官、聖心女子大学文学部助教授、東京大学文学部教授、東京大学大学院人文科学研究科教授、大学共同利用機構法人人間文化研究機構理事を歴任。

著書に『日本古代の宮都と木簡』吉川弘文館、『古代の遺跡と文字資料』名著刊行会、『出土資料の古代史』東京大学出版会、『古代の地方官衙と社会』山川出版社、『大学の日本史 教養から考える歴史へ1』山川出版社、『日本古代の歴史6 列島の古代』吉川弘文館ほか。

○コメンテーター：吉村 武彦 (よしむら たけひこ)

明治大学名誉教授。専門は日本古代史。博士(文学)。

東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退。東京大学文学部助手、千葉大学専任講師・助教授・教授、明治大学文学部教授を歴任。

著書に『日本古代の政事と社会』塙書房、『日本古代の社会と国家』岩波書店、『蘇我氏の古代』岩波新書、『大化改新を考える』岩波新書ほか。

大宰府と古代山城・鞠智城

小田富士雄（福岡大学名誉教授）

【本文】

1. 白村江敗戦後の日・唐・羅交渉	2
2. 古代大宰府と鞠智城	3
3. 大宰府史跡	4
4. 大宰府政庁遺跡の調査	4
5. 都城外郭遺跡の調査—水城・大野城・基肆城—	4
6. 大宰府系古瓦概要	6
7. 国指定・重要文化財 福岡県大宰府跡出土品指定目録	8
8. 参考文献	9
9. 追補	9

【資料】

	防衛・都城の系譜	11	
大宰府 都城・系譜	大宰府周辺の遺跡・大宰府の成立関係略年表	12	
	大宰府関係史跡の保護	13	
	大宰府の外交・客館年表、大宰府条坊跡及び周辺図	14	
	大宰府政庁周辺復元案・官衙の配置（鏡山・石松・小田復元案）	15・16	
	南朝（建康）都城・唐長安城・百済泗批羅城復元図	17	
	大宰府政庁建物期別変遷図・大宰府都城の系譜	18	
	古瓦＝大宰府系古瓦とその祖系となった古瓦	19	
	山城の記録史料・古代山城分布図	20	
	山城の城門跡法量対照表・水城形成図・小水城・西門古瓦	21	
	大野城・基肆城・鞠智城平面図	22	
大野城・水城	大野城内 城門・礎石群・石垣分布図、大宰府口城門変遷	23	
	大野城・基肆城 門礎実測図	24	
	基肆城跡と出土軒瓦	25	
基肆城	大宰府都城Ⅰ・Ⅱ期の軒先瓦拓影	26	
	大宰府外郭線想定図	27	
	九世紀以降の大野城関係史料	28	
	鞠智城跡城域図	29	
	鞠智城	鞠智城跡全体図	30
		鞠智城跡建物遺構分布図	31
		鞠智城 百済系銅造菩薩像・木簡・瓦当・堀切門唐居敷門礎	32
		鞠智城跡変遷表	33

1. 白村江敗戦後の日・唐・羅交渉

現在の地に大宰府都城が設置されるに至った直接的契機が、663年(天智天皇2)の白村江口^{はくせんこう}において唐・新羅連合軍によって日本側軍団が大敗を被った点にあったことは周知されている。この敗戦によって日本側では緊急に果たさねばならない二つの課題を負うこととなった。その第1は西日本地域の防衛体制を早急に固めて唐・新羅連合軍侵攻の脅威に対処せねばならないこと。第2には国家体制の改革すなわち大陸側の強力な統一国家体制(律令国家体制)に追いつく改革を達成することであった。この二つの課題についての日本側の対応経過について、筆者は二つの考説を公表しているので詳細についてはそれに拠ってもらい、ここでは要約した結果を11頁にまとめておく。

第一の課題については敗戦の翌年から対馬・志岐・筑紫に防衛体制をすすめ、遺跡として金田城・大野城・基肆(椽)城・水城・鞠智城などが残されている。しかし671年(天智天皇10)12月3日天智天皇崩御まで唐・新羅軍の来襲はなかった。むしろ敗戦後の天智外交は両国との和平交渉の復活に終始している。敗戦後の天智政権は大陸への干渉を絶ち、さきの2つの課題を果たすべく国内政治の充実に傾倒していたようである。和平交渉を求めて積極的に日本側に通交を求めてきたのは唐・新羅からであった。以下白村江敗戦後の日・唐・羅交渉の経緯を要述しておく。

まず日・唐・羅交渉は天智朝に3回が数えられる。

第1回 664年(天智天皇3)5月17日

百濟鎮將劉仁願遣使し、表函・獻物を進上するも、日本側は中国皇帝からの公的遣使ではなく、百済に駐在する鎮將の個人的遣使であるとの理由で入京不許可とし、筑紫において筑紫大宰が丁重に対応して帰国させた。

第2回 665年(天智天皇4)9月23日

唐国皇帝の使者沂州司馬上柱国司馬劉德高が郭務棕・羅軍ら254人を伴って筑紫に至る。国書を進上し入京した。12月帰国。

第3回 671年11月10日～672年(天智天皇10～弘文元)

「唐国使人郭務棕六百、送使沙宅孫登等一千四百人、総合二千人乗船四十七隻」が筑紫に來航した。その滞在中の12月3日に天智天皇崩御した。21日書函・信物進上。翌年5月12日賜物し、30日帰国した(入京せず)。

第3回の2千人に及ぶ來航については直木孝次郎氏の論考がある。氏は1400人を白村江戦時の日本人捕虜、600人はそれを監視・護送するに必要な人員(唐人と指揮下の百濟人)と推定し、交換条件として軍事物資の提供・捕虜の身代金を要求したものであったとされている。

ここで眼を大陸側に転じてみよう。まず唐は白村江戦に続いては第4回高句麗征討を進めている。高句麗は666年正月と10月、668年7月に日本に「調進」遣使している。これは唐の征討に対して日本に援軍を求めたのではないかと憶測されている。668年9月高句麗は滅亡した。

百濟・高句麗と唐に制圧されて残るは新羅である。白村江戦の翌年に唐はやくも日本に交渉を求めてきたが、日本側もその平和外交に応じて665年に唐に遣使して両国関係は復活した。このような動向に関しては新羅も敏感で、668年に日本に遣使調進し(9月12日)、日本からも新羅使の帰国にあわせて11月5日に遣新羅使を出している。

新羅使の来日は656年(斉明天皇2)を最後に途絶えていたがここに両国の交渉も復活した。日唐関係

の復活を重視した新羅側の対日政策の転換であった。一方新羅と唐との関係は平穏ではなかった。670年になると両国関係は急速に悪化してゆく。同年3月新羅・高句麗遺民連合軍が鴨緑江以北に進攻して唐軍を破った。以後両国は全面戦争に突入することとなる。この間唐は4月には西方の吐蕃（チベット）討伐戦に入るも8月に唐軍大敗となった。つづく10月には新羅海軍によって唐の軍糧運搬船団が撃破され、唐軍は百済地域から前面退却せざるをえなくなった。唐羅関係はさらに悪化してゆく。そして676年（天武天皇4）唐は安東都護府を遼東まで後退させ、ここに新羅の半島統一が実現した。以後10世紀代の新羅滅亡まで日・唐・羅関係はほぼ安定期に入っていた。上述のごとく白村江戦後は唐羅は交戦状態に入り、必然的に日本への進攻は不可となり、唐はいちはやく新羅の背後に在る日本とは平和外交に転ずることとなった。このような外交手段は中国歴代にみられる「遠交近攻策」を採用したにすぎないともいえるであろうか。いずれにせよ日本側にとっては脅威は回避されたわけであり、国内改革（律令国家への進展）に集中できることとなったことは幸運であったというべきであろうか。

（ 小田富士雄「回顧・大宰府史跡の調査研究（上）」
「古文化談叢」第89号 2023年 ）

2. 古代大宰府と鞠智城

これまでの調査成果を整理検討された鞠智城・温故創生館では、鞠智城の創設から機能が停止する10世紀中頃まで5期の変遷を提示された。すなわちⅠ期は665年（大野・基肄2城の築城開始）から698年（大野・基肄・鞠智城の緒治）まで。つづくⅡ期は緒治から8世紀初頭まで。Ⅲ期は8世紀前半から後半まで。Ⅳ期は8世紀後半から9世紀中頃まで。Ⅴ期は9世紀中頃から10世紀中頃までとされた。これらの区分観は建物群と遺物編年の検討から組み立てられたものであった。そのなかで鞠智城の創設時期を考える立場からはⅠ・Ⅱ・Ⅲ期あたりまでが対象となる。筆者はさきに大宰府都城制型山城を設定した際に、それが大宰府政庁の成立諸段階と緊密な関係にあることを指摘した。すなわち、

- ①7世紀第3四半期=Ⅰ期古段階。水城・大野城・基肄城の創設。政庁最古期の掘立柱建物や欄列を建設。
- ②7世紀第4四半期~8世紀初頭=Ⅰ期新段階。山城は修理期に入る。政庁はのちの礎石立政庁の前進的掘立柱建物・欄列建設。この段階後半、直接的には689年6月飛鳥浄御原令の制定によって地方官人の移動や官位授与のほか、条坊制施行の検討をすすめ、実質的に大宰府体制が発足した。そして701年には大宝令が制定されて、ひとまず律令制度の完成をみた。
- ③8世紀初頭~前半=Ⅱ期。政庁や防衛施設は礎石建物・瓦葺にかわり、条坊制施行も完了する政庁の官衙型配置（所謂「コ」字型配置）出現。

以上の変遷と鞠智城を対照してみると、

大宰府政庁Ⅰ期古段階	鞠智城Ⅰ期前半
大宰府政庁Ⅰ期新段階	鞠智城Ⅰ期後半~Ⅱ期
大宰府政庁Ⅱ期	鞠智城Ⅲ期前半

のように対比照合することができよう。すなわち鞠智城の創設は上述したように、若干大宰府都城よりおくられてズレを生じたとしても、ほぼ両者連動する動向が読みとれるようである。

3. 大宰府史跡

1968年（昭和43）に始まった発掘調査と並行して指定地拡張も継続され、1970年（昭和45）9月21日文化庁官報告示されて、現行の2県7市町にわたる8遺跡構成の大宰府史跡は次のとおりである。

史跡名	所在地
①特別史跡大宰府跡	太宰府市
②特別史跡水城跡	太宰府市・大野城市・春日市
③特別史跡大野城跡	太宰府市・大野城市・宇美町
④特別史跡基肄城跡	筑紫野市・佐賀県基山町
⑤史跡大宰府学校院跡	太宰府市
⑥史跡観音寺境内及び子院跡	附・老司瓦窯跡 太宰府市・福岡市
⑦国分寺瓦窯跡	太宰府市
⑧筑前国分寺跡	太宰府市

4. 大宰府政庁遺跡の調査

大宰府政庁跡に現存する正殿・脇殿・中門・南門などの礎石群は、発掘調査以前まで創建時の状況が現在まで保存されてきたものと伝承されて、誰も疑いをささむことはなかった。そして1968年（昭和43）に始まった発掘調査はまず政庁跡の中門跡、南門跡から開始された。その結果は現存する礎石はⅢ建時のもので、その下にⅡ建時、さらにその下に地山に掘りこまれた創建時（Ⅰ期）の掘立穴が発見されたのである。Ⅲ期礎石の下には広く焼失灰層がみられ、これはその後調査された正殿などにも及んでいて、出土遺物などからも天慶4年（941）の藤原純友の乱によるⅡ期政庁焼失に比定された。またⅡ期政庁の成立は8世紀初頭～前半に、Ⅰ期創建は7世紀後半に比定されたのである。さらにこの政庁跡の南側にまで官衙遺構の広がり（前面官衙）がみられ、政庁中軸線より西側の不序地区官衙と名付けられ、東側に日吉地区官衙も想定された。上述した石松氏の逆凸字型政庁説の南側突出部にあたる。

5. 都城外郭遺跡の調査

宝満山南西麓から大野城～水城～小水城を結ぶ東西土塁線（太宰府市～大野城市～春日市）で北側外郭線を、基肄城～とうれぎ土塁～閼屋土塁で都城南側外郭線を構成している。

水城 北側外郭線を代表する水城跡土塁は、白村江敗戦の翌年（天智天皇3年＝664年）、「筑紫に大堤を築きて水を貯へしむ。名づけて水城と曰う」と記された書紀の記事で周知され、四王寺山西麓に発して西に延びる全長1.2kmに及ぶ土堤である。博多側と大宰府側を明確に区分している大堤が目につきやすく、中世・近世の記録にも記されている。やがて近代科学的研究対象とされるのは、大正2年（1913）国鉄鹿児島本線の東西拡張工事によって、大堤が横断されて断面が露出した。当時九州大学の前身である福岡医科大学に在職した中山平次郎博士の綿密な観察調査と研究によって、現今の水城調査研究の基礎が据えられたことなど旧稿で述べておいた。この大堤の西端部では、さらにその西側で北側に開く数個の八つ

手状丘陵の北端部を小規模な土塁（「小水城」）で結んで連続させてゆく手法が講じられている。大堤高約13m、基底部幅約80mの規模で、現国道線上に在った東門付近では大堤の博多側に幅約60m、深さ3mほどの外濠の存在が確認されている。また、大堤の大宰府側には内濠が設けられ、大堤は下層基壇と幅をせばめた上成基壇の2段構成から成り、地盤の軟弱な基底部には木の枝や葉を敷きつめた敷祖架（敷祖架）工法が採用されている。植物学的検討から5月中旬から7月中旬に工事が行われたことが判明している。さらに土塁の構築には版築技法が採用された。また土塁基底部には敷筋所に木樋を通して外濠に流水して水を貯える仕組みであったことも明らかにされている。土塁の西限近くに在る西門地区では3時期にわたる門の変遷が明らかにされている。

I期 創建期で掘立柱式。土塁切通しの壁面は石垣補強で、1間となる柱間は4.22m。

II期 8世紀初～前半。礎石式瓦葺（鴻臚館式軒瓦）

III期 8世紀後半以降。

水城の発掘調査は平成5年（1993）第5次5箇年計画から17年に及んで実施され、平成22年（2010）に大部な報告書が刊行された。

大野城 水城東限と結ばれた四王寺山の山頂（410m）部をとり入れて構築されたのが大野城跡である。水城築堤の翌年（665年）南の基肄城とともに百濟高官の指導のもと築城された（天智紀4年条）。総長6.5kmの土塁線と谷部には7箇所の石垣を、土塁線の北と南にさらに外周土塁を巡らす。また土塁線上の9箇所には新発見も加えて城門が設けられ、城内には8箇所計70棟の礎石建倉庫群がある。福岡県教育庁文化財保護課では国庫補助事業として平成6～17年（1994～2005）に大宰府口城門、尾花地区土塁・百間石垣の調査・整備を実施してきたが、その後平成15年（2003）7月19日未明に襲来した集中豪雨によって、大野城跡関係に362箇所の崖崩れや土砂流失などの大被害が計上された。福岡県では「大規模遺跡対策・災害復旧班」が組織され、大宰府史跡整備指導委員会も関与して調査・修復工事にあたり、平成21年（2009）度に完了し、翌年3月には報告書も刊行された。遺跡の大災害は一方で新知見をもたらしてくれる利点もある。以下にそのいくつかを記しておく。

- ①城門の新発見。従来4箇所が知られていたが新たに5箇所が発見された。
- ②北石垣城門。唐居敷構造礎石上の扉軸槽穴に鉄製軸摺金具が装着された状態で発見された。
- ③北石垣ほか谷地形箇所では下底面から下成・上成二段式に石垣が積み上げられ、その最上部に従来から知られている土塁が築城される入念な構成が明らかになった。

さらに大宰府口城門についてはI～III期の変遷が明らかになっている。これを図示すると資料13頁のようである。水城と同じ3期変遷がたどられ、II期城門屋瓦には鴻臚館式軒瓦が使用されている。同様な掘立柱形式から礎石形式への変化は、後述する大宰府制政庁跡・基肄城跡や鞠智城跡でも確認されている。また大宰府主導のもと画一的な整備作業が実施されたことが推察される。さらにIII期の始まりを宝亀5年（774）の四王寺設置に求めている。同年3月、新羅に不穏な呪詛の動きありとして、山頂鼓峯に四天王像を安置し浄行僧4名を配した。博多湾から山陰地方の日本海に及び新羅海賊の横行は9世紀代にまで及び、貞観9年（867）5月25日には「仁祠」を建て四天王像布絵を山陰諸国に配布して僧に折らせた（『日本三代実録』）。現在出雲市斐川町の標高207.9mの山頂に在る天寺平庵寺が注目されている。大宰府四王寺研究にも参考にすべき事例となろう。

基肆城 南側外郭線を画する指標とされるのは佐賀県基山町の**基肆城跡**(山頂 404.5m)である。大野城跡の南8kmほどに位置する。尾根部を主体とする土塁と、谷部を遮断する石垣(水門跡・城門跡)で外郭線を構成し、総面積は大野城跡の4分の1ほどである。土塁の外側は急傾斜し、内側には平均幅2mほどの平地(通称“車道”)が巡っている。城内の地勢は中央東寄りを南流する住吉川(筒川)によって東西2つの山地域に区分される。西側は北半の北帝と南半の坊住、東側は北半の車道と南半の大久保の4地区で構成される。礎石遺構は西側に多く知られ、尾根から派生して東に下る支脈と浅い谷を交互にくりかえして10箇所にも及ぶ東行小尾根群を構成した上に設営されている。城内遺構はつぎのとおり。

城門跡-4箇所

南門跡(水門跡)・東南門跡(仏谷門)・東北門跡・北帝門跡(北門)

…後2者は筑紫野市

礎石建物-12群 40棟

坊住地区 I・II群、北帝地区 III～XI群、大久保地区 XII群

建物群の多くは大野城跡と同じく5×3間プランで一部に6×3間のものがみられる。なかでも西側土塁近くの高所に在るIII群1号建物(通称“大礎石群”)は10×3間の長舎型式で百済系単弁軒丸瓦と三重弧文軒平瓦が使用されている。

礎石建物群の多くは縄目平瓦を伴出して8世紀代に建てられたものも少なくないと考えられる。長舎型式のものは正倉院文書の諸国正税帳にみえる「法倉」に対比されるが類例は新羅山城などにもみられる。これら遺構群の確認調査は平成15～18年(2003～6)におこなわれて40棟を数えているが、さらに増えることも予想される。出土古瓦には複弁8葉・単弁20葉の軒丸瓦(政庁Ⅲ a・b式)、偏行唐草文軒平瓦(老司Ⅱ式)があり、8世紀以降も大宰府政庁との深い関係が示されている。

また、平成21～27年(2009～15)には国庫補助のもとに南門跡石垣の解体修理が実施された。筆者らも参加して委員会が組織され、大野城跡との比較検討資料を得ることができたことは、創建時の百済高官の指揮した工事の実体をうかがい知ることができた。

6. 大宰府系古瓦概要

所謂大宰府系古瓦は、発掘された遺跡の年代を判定する上で重要な資料であることは論を待たない。すではやく中山平次郎先生も手掛けられ、筆者も継承し発展させてきたことは上述した。現在までの調査で知られてきた古瓦資料のうち、外郭施設・政庁跡・寺院跡などから出土した成立期の古瓦を選んで資料19頁にまとめておこう。

まず外郭施設では大野城跡・基肆城跡・鞠智城跡を主体とし、一部政庁跡出土例を加えた。朝鮮系(百済・高句麗)軒丸瓦や畿内系軒平瓦で構成され、大宰府I期第2段階より下らない成立が考えられる。このうち百済系単弁軒丸瓦については旧稿で論じたことで、大宰府外郭の山城跡から肥前・豊前地域の寺院跡に広がった経緯が考えられてきたが、その後の事例増加などによって現在では一部補訂すべき必要も考えているが後日を期したい。

大宰府第II期は礎石建屋瓦葺が定着する7世紀末・8世紀初～前半の時期で、筆者の設定した大宰府系古瓦の成立期でもある。

老司I式古瓦は上述したように観音寺創建時の専用瓦といえるもので、福岡市・老司瓦窯の製品であ

る。鴻臚館式古瓦の生産窯は未発見ながら政庁Ⅱ期屋瓦の主体をなすことが発掘調査によって確認されたので、政庁跡では政庁Ⅰ式と称することにした。先行した鴻臚館式の名称が広く定着している現状に対しての対応策であることを了承いただきたい。これに続いて老司Ⅱ式（政庁Ⅱ式）、さらに厳密には老司式で律しえない政庁Ⅲ A・B 式軒丸瓦があり、複弁形式から単弁形式への推移が伺われる。老司Ⅱ式軒平瓦と組みあって使用された。この政庁Ⅲ式軒丸瓦は量的にも多く、政庁Ⅰ式と共に政庁Ⅱ期の主体につづく存在である。また政庁Ⅰ式古瓦は水城西門・大野城Ⅱ期城門にも使用されていて、大宰府Ⅱ期の整備では政庁のみならず、先行した外郭施設の再整備まで手がけられたことを示している。

（ 小田富士雄「回顧：大宰府史跡の調査研究（下）」
『古文化談叢』第90集 2024年 ）

7. 国指定・重要文化財 福岡県大宰府跡出土品・指定目録

7. 国指定・重要文化財	
福岡県大宰府跡出土品・指定目録	
一、瓦埴	二七点
一、陶磁器・土器	九二点
一、漆紙文書残決	一点
一、墨書土器・刻書土器・刻書瓦	七二点
一、土製品	一五〇点
一、石製品	二四点
一、木製品	三四点
一、金属製品	六三点
一、ガラス瓶残決	一点
一、簪	一点
一、漆漉布残決	一点
一、瓦埴・土管	四七点
一、陶磁器・土器	一九二点
一、漆紙文書残決	一点
一、墨書土器・刻書土器	三四点
一、土製品	三二点
一、石製品	八点
一、金属製品	三点
一、瓦埴	一八点
一、陶磁器・土器	四二点
一、墨書土器	一点
一、砥石	一点
一、刻書木柱残決	一点
一、金属製品	一六点
(以上政庁跡・糸坊跡出土)	
(以上寺院跡出土)	
(以上水城跡・大野城跡出土)	

8. 参考文献（著者別アイウエオ順）

- 岩下光弘編 「大宰府史跡拡張の経緯」 1994年 太宰府市教育委員会
- 石松好雄 「大宰府庁域考」『大宰府文化論叢』上巻 1983年
- 井上信正 「大宰府条坊研究の現状」『大宰府の文化財第122集・大宰府条坊跡4』V 2014年 太宰府市教育委員会
- 内田律雄 「斐川の山頂に古代寺院-天空の古代寺院天寺平庵寺-」山陰中央新報 2023.4.6
- 小嶋野亮 「大宰府羅城門とその周辺」『都府楼』40号 2008年
- 小田富士雄 「大宰府系古瓦の展開」(一)～(四)『九州考古学』1, 2, 5・6, 13号 1957～1961年九州考古学
のち小田『九州考古学研究・歴史時代篇』1977年 学生社に収録
- 小田富士雄 「水城と大宰府都城」『水城』下巻Ⅱ 2009年 のち小田『古代九州と東アジアⅡ』同成社 2013年に収録
- 小田富士雄 (a)「白村江の戦後処理と国際関係」『古文化談叢』第73集 2015年、(b)「大宰府都城の形成と律令体制」
『古文化談叢』第74集 2015年、のち2論文は小田『古代九州と東アジアⅢ』同成社 2020年に収録
- 小田富士雄編・共著 特集・西日本の「天智紀」山城『季刊考古学』第136集 2016年
- 小田富士雄 「成立期大宰府都城調査の成果と検討」『大宰府の研究』2018年 のち小田『古代九州と東アジアⅢ』
2022年 同成社に収録
- 小田富士雄 「基肆城跡」(小田『古代九州と東アジアⅢ』第4部第10章) 2020年
- 小田富士雄 「大宰府史跡国指定100周年私観」『都府楼』第52号 2021年 のち小田『古代九州と東アジア拾遺篇』
九州古代文化研究会 2022年に収録
- 小田富士雄 「回顧・大宰府史跡の調査研究」上・下『古文化談叢』第89集(2023年)・第90集(2024年)
- 鎌田元一 「平城遷都と慶雲三年格」『律令公民法制の研究』2001年、初出1989年
- 杉原敏之 「大宰府政庁の1期について」『九州歴史資料館研究論集』32集 2007年
九州歴史資料館編「大宰府政庁跡」2002年
九州歴史資料館編「水城跡」上巻・下巻 2009年
- 田中正弘・主祝英徳 「特別史跡基肆(椽)城跡 平成21～27年度水門石垣保存修理事業報告書」基山町文化財調
査報告書第34集 2020年
- 田上 稔編 「特別史跡大野城跡整備事業」福岡県文化財調査報告書第210集 2006年
太宰府天満宮編 「大宰府小史」1952年 太宰府天満宮
- 長 洋一 「四王院の成立と変遷」『太宰府市史・通史編I』第3編第7章第3節 p.817～835 2005年
- 直木孝次郎 「百濟滅亡後の国際関係-特に郭務棕の来日を巡って-」『朝鮮学報』第147輯 1993年
- 中山平次郎 「古瓦類雑考」(一)～(九)『考古学雑誌』6巻4号～7巻4号 1914～1915年 日本考古学会
- 福岡県教育委員会編 「特別史跡大野城跡整備事業V-平成15年7月豪雨災害復旧事業報告-」上巻・下巻 2010年
- 八木 充 「筑業における大宰府の成立」九州歴史資料館編「大宰府政庁跡」X章特論 2002年
- 横田賢次郎 「大宰府政庁の変遷について」『大宰府古文化論叢』上巻 1983年

追補

本文「4. 大宰府政庁遺跡の調査」の項に、下記文章を補足する。

[1] 「大宰府庁域の復元案について」

鏡山猛 1937年 4町四方(周辺の條里制を導入(1町=108m))

「大宰府の遺蹟と條坊」(一)・(二) (『史淵』第16輯・第17輯(集)九州史学会 1937年)

石松好雄 1983年 逆凸字型

「大宰府庁域考」(『大宰府文化論叢』上巻) 吉川弘文館 1983年

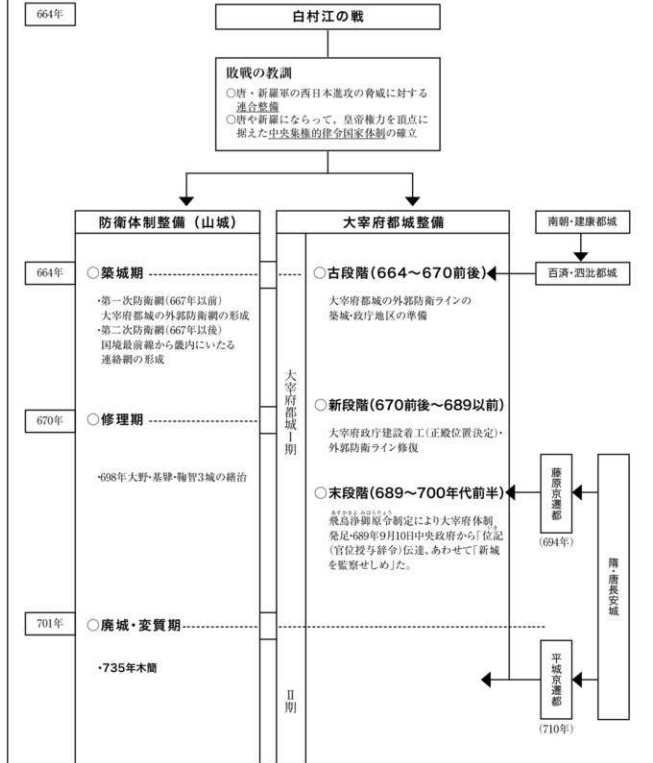
小田富士雄 2018年 南北7町・東西6町(1町=90m)

「成立期大宰府都城調査の成果と検討」(『大宰府の研究』高志書院 2018年)

[2] 多治比眞人池守について

和銅8年(715年)5月22日大宰帥赴任。当時は12年間におよぶ労役として設定された「筑紫の役」(慶雲3年～養老2年=706年～718年)の実施によって大宰府都城整備の仕上げ段階にあったときで、大宰府都城内の景観など環境整備も必要な時期であった。多治比池守には和銅元年(708年)9月30日に造平城京司長官に任ぜられた前歴があり、平城京を手本とした大宰府都城の整備が期待されたことが察せられる。その後、霊龜3年(717年)2月10日「善政」を賞され、翌年3月中納言に昇任して帰京した。大宰府在住は3年ほどであったが、この頃にはほぼ大宰府都城の建設は完成期を迎えたと推測される。8世紀第1四半期ごろに政庁その他、主要施設の成立を考える説も支持されるところである。

防衛・都城の系譜



大宰府・都城の系譜

図1 大宰府周辺の遺跡

- 1:大野城跡 2:大宰府政庁跡 3:学校院跡
 4:観世音寺 5:筑前国分館寺 6:円因分尼寺
 7:水城跡 8:上大利水城跡 9:大土原水城跡
 10:天神山水城跡 11:般若寺跡 12:塔原度寺跡
 13:杉塚院寺跡 14:武蔵寺 15:基肄城跡

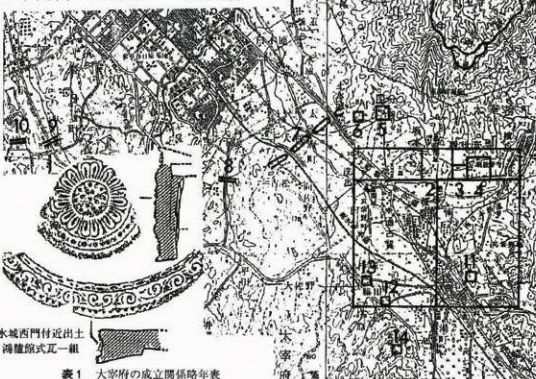


表1 大宰府の成立関係略年表

		536 (寛化元) 那津官家修造		
		609 (推古17) 筑紫大宰初見	前期	
		663 (天智2) 白村江戦に大敗		
大宰府I期	古段階(a) 獨立柱礎	664 (天智3) 対馬・老岐・筑紫に防・烽をおき 水城大堤を築く		筑紫大宰
		665 (天智4) 大野・櫛二城を築く		
	新段階(b) 同上	689 (持統3) 6月飛鳥浄御原令制定 9月位記伝達使者筑紫に到る	後期	
		690 (持統4) 7月大宰・国司遷任		
		694 (持統8) 12月藤原京遷都		
		698 (文武2) 5月大野・基肄・鞠智3城を修築		
大宰府II期	II a期 同上	701 (大宝元) 8月大宝律令制定	大宰館	
		710 (和銅3) 3月平城京遷都		
		769 (神護景雲3)「此府人物股築天下之一部会也」 (続日本紀)		
大宰府III期	II b期 礎石礎瓦葺	941 (天慶4) 6月藤原純友の乱・政庁全焼		
		同上		

大宰府周辺の遺跡地図・大宰府の成立関係略年表

大宰府関係史跡の保護



大宰府関係史跡指定地範囲

特別史跡「大宰府跡」

- ①大正10年(1921)3月1日指定地
- ②昭和45年(1970)・③同年6月追加指定地
- ④昭和45年(1970)9月指定「大宰府学校院跡」
- ⑤同上 指定「観世音寺境内及び子院跡」

特別史跡「大野城跡」

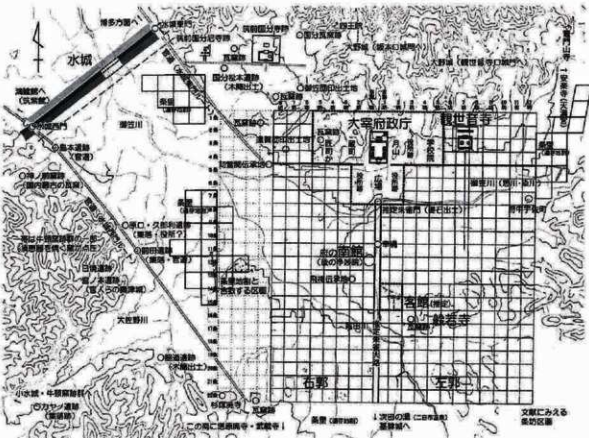
- ・旧指定地(昭和7年〔1932〕・昭和28年〔1953〕)
- ⑥昭和51年(1976)12月追加指定地
- ⑦昭和56年(1981)3月追加指定。大宰府政庁から大野城をつなぐ中間地域の保存完成。
また指定地の階上げについても国庫補助80%(1億8400万円)で従前の3倍強に引き上げられて、大宰府重視のあらわれと言われる現況となった。

大宰府の外交・客館 年表

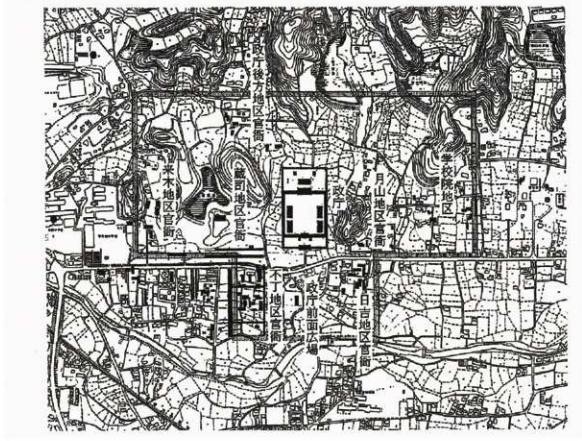
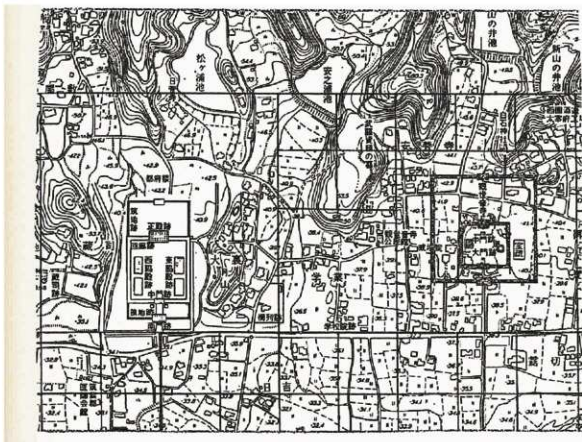
大宰府の外交・客館年表 (1868-1945)

年次	内容
1868 (明治元年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1869 (明治2年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1870 (明治3年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1871 (明治4年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1872 (明治5年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1873 (明治6年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1874 (明治7年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1875 (明治8年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1876 (明治9年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1877 (明治10年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1878 (明治11年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1879 (明治12年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1880 (明治13年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1881 (明治14年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1882 (明治15年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1883 (明治16年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1884 (明治17年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1885 (明治18年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1886 (明治19年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1887 (明治20年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1888 (明治21年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1889 (明治22年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1890 (明治23年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1891 (明治24年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1892 (明治25年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1893 (明治26年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1894 (明治27年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1895 (明治28年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1896 (明治29年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1897 (明治30年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1898 (明治31年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1899 (明治32年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1900 (明治33年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1901 (明治34年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1902 (明治35年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1903 (明治36年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1904 (明治37年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1905 (明治38年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1906 (明治39年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1907 (明治40年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1908 (明治41年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1909 (明治42年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1910 (明治43年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1911 (明治44年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1912 (明治45年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1913 (明治46年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1914 (明治47年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1915 (明治48年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1916 (明治49年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1917 (明治50年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1918 (明治51年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1919 (明治52年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1920 (明治53年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1921 (明治54年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1922 (明治55年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1923 (明治56年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1924 (明治57年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1925 (明治58年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1926 (明治59年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1927 (明治60年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1928 (明治61年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1929 (明治62年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1930 (明治63年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1931 (明治64年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1932 (明治65年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1933 (明治66年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1934 (明治67年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1935 (明治68年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1936 (明治69年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1937 (明治70年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1938 (明治71年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1939 (明治72年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1940 (明治73年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1941 (明治74年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1942 (明治75年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1943 (明治76年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1944 (明治77年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)
1945 (明治78年)	大宰府府政の開始 (佐賀藩の藩政)

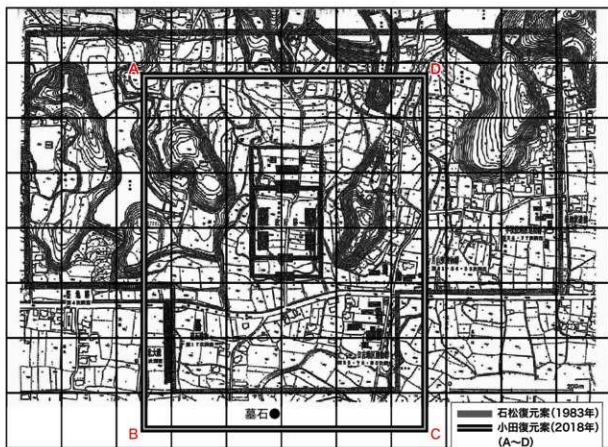
西鉄原車組跡の土地区画



大宰府の外交・客館年表 (上)、大宰府条坊跡及び周辺図 (下)



大宰府政庁周辺復原案・1、官衙の配置（上・鏡山猛、下・石松好雄）

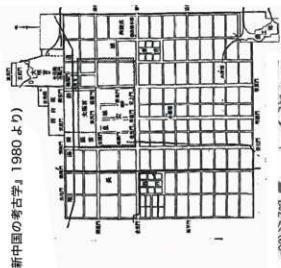


大宰府政庁周辺復元原案・2（石松案・小田案を重ねて示す）



大宰府政庁及び周辺官衙の配置

唐長安城（『新中国の考古学』1980より）

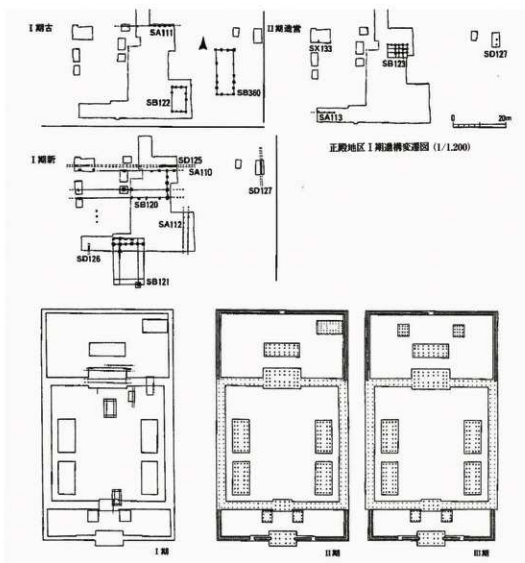


百濟流經和羅城平地形態（林淳登 2003）

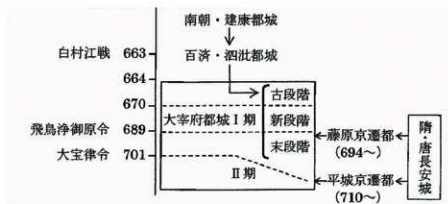


南朝「建康」郡城付近地形図（秋山日出雄氏による）

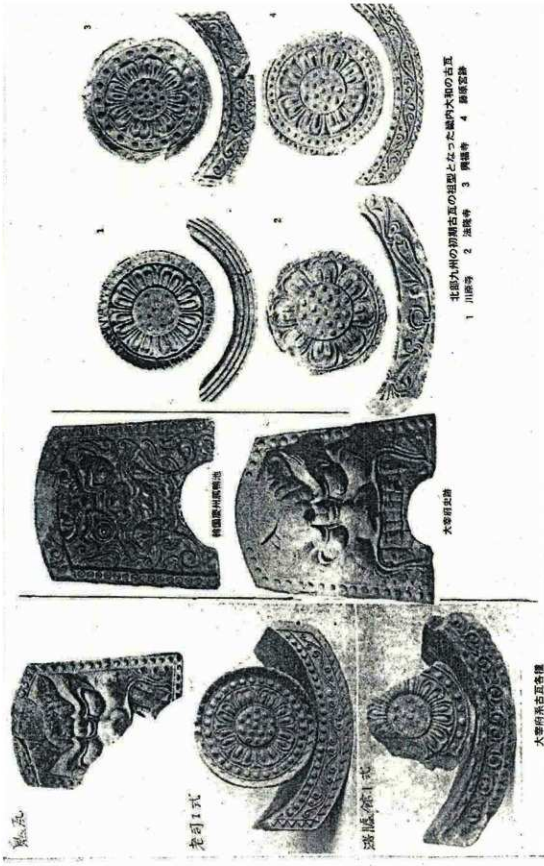
大宰府政庁の成立と背景



大宰府政庁建物期別変遷図 (九州歴史資料館 2002 『大宰府政庁跡』)



大宰府都城の系譜



北部九州の初期古瓦の型となった畿内大和の古瓦
 1 川原寺 2 法興寺 3 興隆寺 4 長原宮跡

龍瓦

龍司1式

瑞鳳合瓦1式

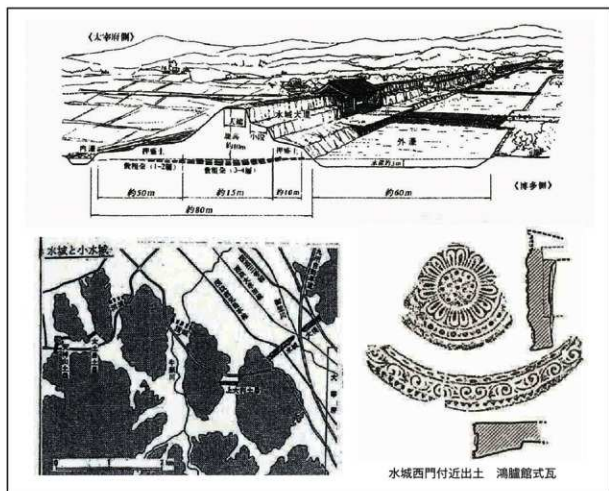
大聖前系古瓦各種

古瓦 = 大聖前系古瓦とその亜系となった古瓦

山城名・城門名	間口同柱の志一志距離	柱型の志一志距離	柱型の志一志距離	備考	ランク	
大野城	太宰府口	I期 8.85 m (3間) II・III期 5.1 m (1間)	掘立柱	— 方形	掘立柱径 50 cm	A
	北石垣	城内側 4.1 m～城外側 4.7 m	掘立柱	3.06 m 方形	掘立柱径 45 cm	B
	水城口	4.8 m (鏡山猛測 4.68 m)	掘立柱	3.78 m 円形	掘立柱径 60 cm	B
	原	I期 3.6 m II期 —	掘立柱 礎石立	— 円形 2.7 m 円形	掘立柱径 40 cm	C C
基肄城	東北門	2.72 m	掘立柱	1.94 m 円形	掘立柱径 40 cm	C
鞠智城	堀切門	3.8 m	掘立柱	2.8 m 円形	一石構成・掘立柱径 60 cm	C
	深迫門	—	礎石立	— 円形	現存は一石のみ	
	池ノ尾門	—	礎石立	— 円形	同上	
金田城	二ノ城戸	2.8 m	礎石立	2 m 円形		C
	南門	3.2 m	礎石立	2.4 m 円形		C
水城	西門	I期 4.32 m (1間)	掘立柱	— 円形	掘立柱径 50 cm	B
		II期 — (3間)	礎石立	—	門壁間幅 11.0 m	

〔補記〕 大野城・水城は九州歴史資料館・太宰府市教育委員会、鞠智城は熊本県教育委員会、金田城は対馬市美津島町教育委員会発行の調査報告書による。また大野城の一部・基肄城は鏡山猛『大宰府都城の研究』による。鞠智城堀切門は新たに鞠智城遺跡発掘生館に依頼した調査計測値である。

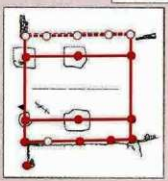
山城の城門跡法量対照表（府・水城西門跡）



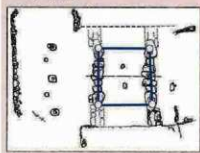
水城形成図・小水城・西門古瓦

太宰府口城門変遷図

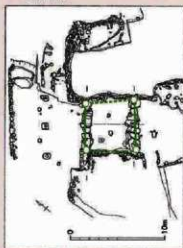
御造頭と女ふり第七世紀後半の第1期は獨立柱形式、第Ⅱ期は8世紀初小垣に律令制の整備によって、礎石形式となる。第Ⅲ期は第Ⅱ期を複製し、石垣周壁にも石垣を増築して門柱に密着させている。



第Ⅰ期城門
第七世紀後半
獨立柱形式



第Ⅱ期城門
八世紀初頭
礎石形式



第Ⅲ期城門
八世紀後半以降
礎石形式

●【城門】

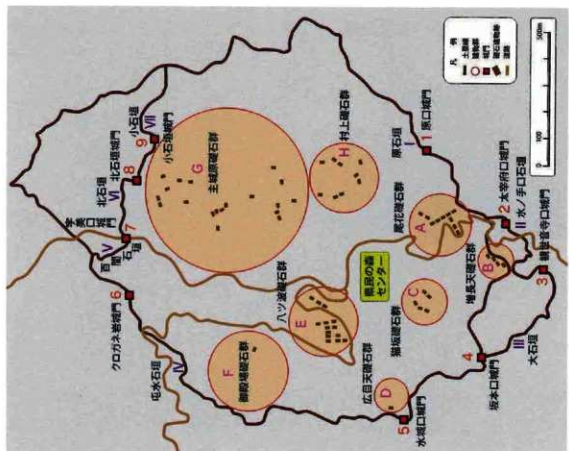
- 1 原口城門
- 2 太宰府口城門
- 3 観世音寺口城門
- 4 坂本口城門
- 5 水城口城門
- 6 クロガネ岩城門
- 7 芋菜口城門
- 8 北石垣城門
- 9 小石垣城門

●【礎石群】

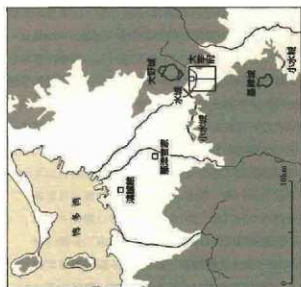
- A 尾花礎石群
- B 増長天礎石群
- C 猫松礎石群
- D 広目天礎石群
- E ハツ波礎石群
- F 御殿礎石群
- G 主殿礎石群
- H 村上礎石群

●【石垣】

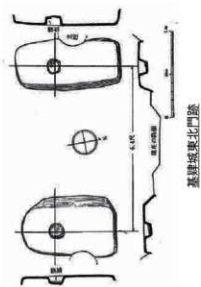
- I 原石垣
- II 水/手口石垣
- III 大石垣
- IV 屯水石垣
- V 百間石垣
- VI 北石垣
- VII 小石垣



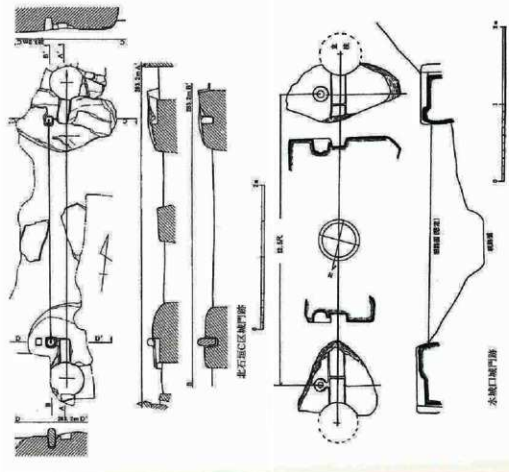
大野城内 城門・礎石群・石垣分布図、大宰府口城門変遷



大野城，水城，大野城，基肆城



基肆城北門

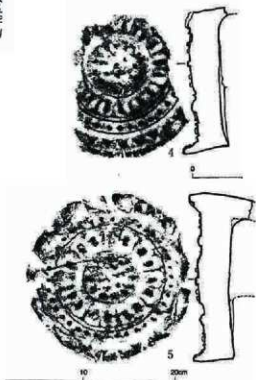
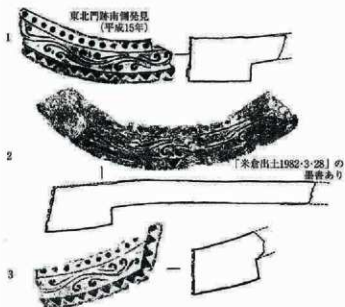
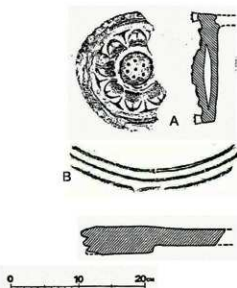


大野城·基肆城 門礎測量圖

大野城，基肆城 門礎測量圖



百濟系單分軒丸瓦 (A)
三重弧文軒平瓦 (B)

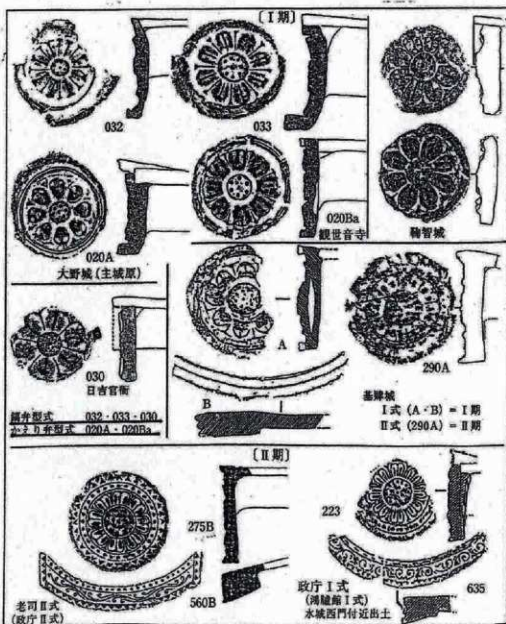


基肄城Ⅱ式軒瓦

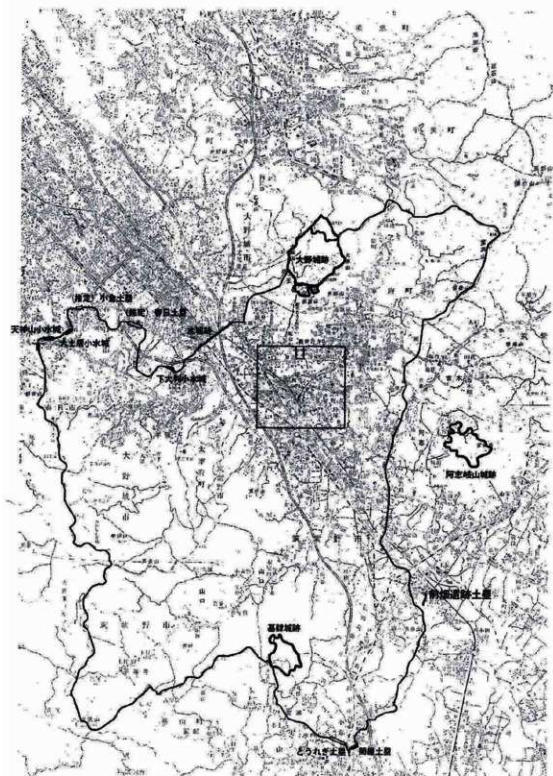
(1～4・政庁ⅢA式、5・范型亀裂痕のあるⅢ式軒丸瓦)

瓦型式	基肆城 I → 020A ← 020Ba → 河越館式 (政庁 I 式) → 政庁 III 式
政庁 I 期	① 段階 ② 段階 ③ 段階
遺跡・遺構	基肆城 (665~) → 大野城 主城原 クログネ岩城門 ハツ波 ? ← 観世音寺 官人居住区 → 基肆城 (II 式) 大野城 太宰府口城門 政庁 水城西門 (杉原廟寺) (日吉神社)

軒先瓦と大宰府関連遺跡の推定編年



大宰府都城 I・II 期の軒先瓦拓影



大宰府外郭線想定図

大宰府史跡発掘50年記念特別展「大宰府への道」- 古代都市と交通 - より転載

大國史にみる鞠智城 * 『国史体系』吉川弘文館

甲申、令大宰府諸治大野。基肄。鞠智二城。

(書き下し文)

〔甲申、大宰府をして大野・基肄・鞠智の三城を誹り治めしむ。〕

『日本紀』文武天皇二(六九〇)年五月二十五日条

丙辰、肥後国言、菊池城院兵庫鼓自鳴。丁巳。又鳴。

(書き下し文)

〔丙辰、肥後国言す、菊池城院の兵庫の鼓自ら鳴る〕

〔丁巳、又鳴る。〕

『日本文藝天皇實錄』天安二(八五〇)年二月二十四、二十五日条

肥後國菊池城院兵庫鼓自鳴。同城不動倉十一宇火。

(書き下し文)

〔肥後國菊池城院の兵庫の鼓自ら鳴る〕

(同城不動倉十一宇火)

『日本文藝天皇實錄』天安二(八五〇)年六月二十日条

肥後國菊池郡城院兵庫戸自鳴。

(書き下し文)

〔肥後國菊池郡城院の兵庫の戸自ら鳴る〕

『日本三代實錄』元慶三(八七九)年三月十六日条

熊本県教育委員会『鞠智城跡II』熊本県文化財調査報告第276集 2012



スクリーントーンの
部分は追地を表す

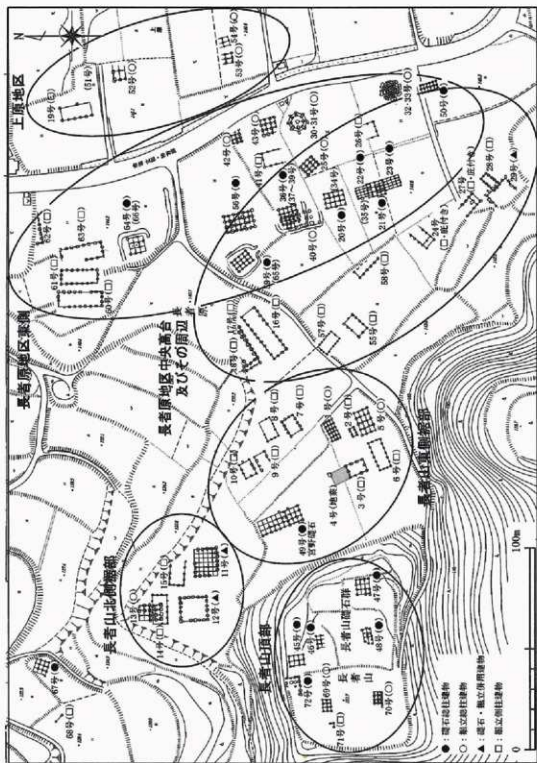
熊本県教育委員会『鞠智城跡』第10次～第12次調査報告 熊本県文化財調査報告第116集 1991

鞠智城跡城域図



熊本県教育委員会『鞠智城跡』-平成5～23年度鞠智城整備事業の報告-
熊本県文化財整備報告第4集 2012

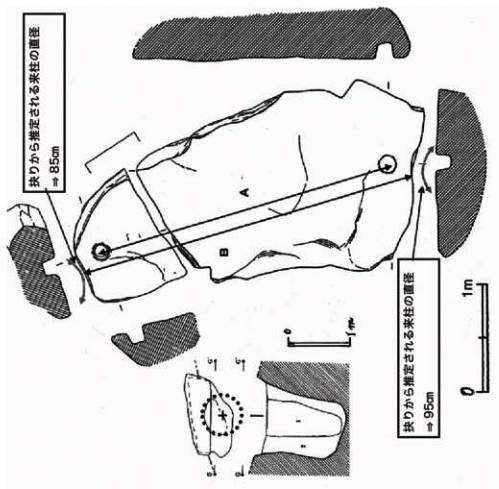
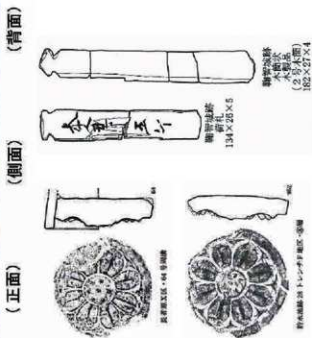
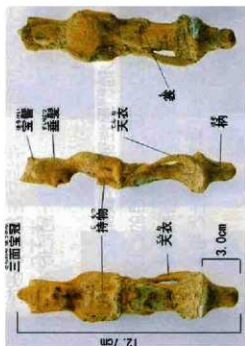
鞠智城跡全体図



熊本県教育委員会『新智城跡Ⅱ』- 新智城跡第8次～32次調査報告 - 熊本県文化財調査報告第276集 2012

新智城跡建物遺構分布図

鞠智城跡
百濟系銅造菩薩立像（左上）、瓦当（下段左）、木簡（下段中央）
堀切門跡唐石像・門礎石（右）【鞠智城跡Ⅱ】より転載



鞠智城 百濟系銅造菩薩像・木簡・瓦当・堀切門跡唐石門礎

年代		鞠智城跡の変遷		関連事項	
7C	3	鞠智城Ⅰ期		<ul style="list-style-type: none"> ・白村江の敗戦 (663) ・防人・烽設置 (664) ・長門国城築城 (665) ・大野・椎城築城 (665) ・金田・屋敷・高安城築城 (667) 	
		<ul style="list-style-type: none"> ■ 掘立柱建物の建築 ■ 城門の構築 (深迫・堀切・池/尾門) 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 貯水池の造成 ■ 土塁線の構築 		
	4	<ul style="list-style-type: none"> ・大野・基肆・鞠智城統治 (698) ・稲積・三野城統治 (699) ・高安城修理 (698・699) 			
	鞠智城Ⅱ期				
8C	1	<ul style="list-style-type: none"> ■ 建物配置の改変 	<ul style="list-style-type: none"> ・高安城廃城 (701) ・備後国茨城・常城併める (719) 		
	鞠智城Ⅲ期				
	2	<ul style="list-style-type: none"> ■ 礎石建物の出現 			
	3				
9C	4	<ul style="list-style-type: none"> ■ 礎石建物の大型化 	<ul style="list-style-type: none"> ● 池中心部 廃絶 	<ul style="list-style-type: none"> ・肥後国が大國に昇格 (795) 	
	鞠智城Ⅳ期				
	1				
	2				
10C	3			<ul style="list-style-type: none"> ・菊池城院、兵庫鼓鳴、不動倉11 宇火 (858) 	
	鞠智城Ⅴ期				
	4	<ul style="list-style-type: none"> ■ 礎石建物の再建 	<ul style="list-style-type: none"> ・肥後国山本郡設置 (859) ・菊池城院、兵庫鼓鳴 (879) 		
	1				
2					
3					
廃城					

鞠智城跡変遷表

熊本県教育委員会『鞠智城跡Ⅱ』

- 鞠智城跡第8次～32次調査報告 - 熊本県文化財調査報告第276集 2012

鞠智城の調査・研究と成果

長谷部善一（熊本県教育委員会）

1 鞠智城と大宰府に関わる研究史

坂本経亮「鞠智城址に掘米原遺跡に就いて」『地歴研究』第10編5号 昭和12年（1937年）

- ①有明海方面より侵入した外敵に備へ、同方面の異変を防烽の制によって大宰府に中継する。
- ②豊穰なる肥後の物資、兵せられる器を蓄へ大宰府の非常時に備へる。
- ③九州南部に蟠踞して叛服常なき熊襲族に対して重鎮とした。

鞠智城 東京シンポジウム「古代山城鞠智城を考えるII」

平成22（2010）年8月熊本県・熊本県教育委員会より役割に関する議論（抜粋）

- ・鏡山 猛氏 「有明海侵入的の確認と伝達」「大宰府非常時に備えるための物資・兵器の蓄え」に関連した認識の研究者には、鏡山がいる。鏡山は、昭和43（1968）年、『大宰府都城の研究』の中で、鞠智城の役割を「戦略的な意味よりも、軍略的な意味が強かった」との見解を示した。
- ・乙益重隆氏 「有明海侵入的の確認と伝達」「九州南部の熊襲族に対する重鎮」に関連した認識の研究者には、乙益重隆がいる。乙益は、前述の論文の中で、外敵対策を築造の主な目的としつつも、さらに突っ込んで有明海・八代海方面から侵入する外敵対策が考慮された可能性を指摘した。また、南九州の単人対策も考慮された、との指摘を行った。
- ・西谷 正氏 西谷は、坂本の「有明海侵入的の確認と伝達」を更に踏み込んだ、積極的な認識を示す。平成18（2006）年に講演の中で、鞠智城が単なる兵站基地ではないと断じた。有明海に進入した唐・新羅連合軍を逸早くとらえ、その情報を大宰府に送るとともに、連合軍を背後から討つという積極的に、戦略的な機能を想定している。
- ・岡田茂弘氏 「九州南部の熊襲族に対する重鎮」に関連した認識の研究者には、岡田茂弘がいる。鞠智城跡史跡指定を記念したシンポジウム（平成16年）の討論の中で見解を示し、その内容をあらためて平成21（2009）年の「鞠智城東京シンポジウム 古代山城鞠智城を考える」で詳細に説明した。それによると、白村江の戦いの直後の防衛のためというわけではなく、多様な官衙施設を設置するために築造もしくは改修したとし、南九州での不測の事態に備えたものだと考えた。
- ・小田富士雄氏 小田は、前述の論文の中で、鞠智城の機能を地理的・地形的特徴から、守る面と攻める面との両方の機能を併用した「押し出しの城」であったと想定した。この観点は、九州における古代山城のネットワーク論であり、単体としての「鞠智城」論ではなく、朝鮮式山城、神籠石系山城全体の中に鞠智城を位置づけるべきとの考え方を示した。併せて、後の「軍団」機能が付与された施設への変化をも想定した。
- ・西住欣一郎氏 西住は、鞠智城が大宰府陥落後の控えの拠点として設定されていたことを想定した。ただし、8世紀以降は南九州の総括を行う城としての機能に変化したとの認識は、坂本の「九州南部の熊襲族に対する重鎮」に通じる。
- ・甲元眞之氏 甲元は、鞠智城が大宰府などを背後から支援する兵站基地の役割に異を唱えた。それよりも、60～63号掘立柱建物が政庁的な遺構配置であることを踏まえ、「斉明期に朝倉官が陥落した場合の行宮として構想された」と考えた。そして7世紀後半には山城に改築され、8世紀前半以降の南九州の動乱に備える機能に変化したものと指摘した。

2 鞠智城調査研究の成果

(1) 築城期 鞠智城I期（7世紀第3四半期～第4四半期）

創建期

7世紀
第4紀
第3四
半期

鞠智城I期

軍事拠点としての最低限の機能が
緊急的に整備された。

この時期は、鞠智城の創建期にあたり
ます。朝鮮半島南西部で起こった「白村江
の戦い」での敗戦の後、唐・新羅の連合軍
の侵攻に備えて、他の古代山城とともに
鞠智城が築造された時期です。鞠智城の
創建については、『続日本紀』の文武天皇
2（698）年5月条に、大野城、基肄城、鞠
智城の3城を修復したという記事があるこ
とから、665年に築造された大野城、基肄
城とはほぼ同じ時期に築造されたと考えら
れます。

この時期に鞠智城では、深道・堀切・池
ノ尾の各城門や南側・西側土塁線を含む
外郭線が構築され、城としての機能が急

速に整備されました。また、城内には、長
者原地区の長者山山頂部から長者山東側
裾部一帯、長者原地区中央部高台におけ
て倉庫や兵舎に使用されたと考えられる
掘立柱建物群が建造され、城城北側の谷
部には貯水池が造成されました。

この時期に、城としての主たる施設が
整備されていきましたが、建造された掘
立柱建物の構成は多様多様で、総柱の倉
庫が少なく、小型の側柱建物が多い傾向
にあります。これは、外郭線を急速に整備
する一方で、城内施設の整備までは十分
に手が回らなかったためと考えられます。

650年



■ 鞠智城I期の建物
(16号建物跡/兵舎として復元)

16号建物跡は、長者原地区の中央部北
側から検出された掘立柱建物跡で、築
行3間(7.8m)、桁行10間(26.5m)の建
物の扉部分だけに柱がある大型の建物
跡です。現在、兵士が寝泊まりしていた
「兵舎」として建物を復元しています。



■ 貯水池跡

貯水池跡は、長者原地区北側に位置す
る谷部で確認され、発掘調査によって
総面積約5,300㎡の大きな貯水池であ
ることが判明しました。池内部からは、
建築部材等を保管する貯水場などが
確認されたほか、木簡や銅造普賢立像
などの重要な遺物が出土しています。



■ 池ノ尾門跡

池ノ尾門跡は、確認された3ヵ所の城門
のうちの一つで、西側土塁線と南側土
塁線に挟まれた谷部に位置します。発
掘調査によって、谷部を塞ぐように造ら
れた石壁や城内の水を城外に排水する
暗渠状の排水溝、門礎石などが確認さ
れています。

(2) 緒治(隆盛)期 鞠智城Ⅱ期(7世紀末～8世紀第1四半期)

隆盛期

7世紀末
8世紀第1四半期
前半

鞠智城Ⅱ期

城を管理する建物や八角形建物など 城内の施設が最も充実した時期

この時期は、鞠智城の隆盛期にあたり
ます。長者原地区東側から上原地区北側
一帯にかけて、「コ」字形に配置された掘
立柱建物群や総柱の倉庫群が出現する
など、建物の配置に大きな変化が生じて
います。また、南北に配置された2棟の八
角形建物^{ヤシロ}が出現するのもこの時期です。
これらの時期は『続日本紀』に記載されて
いる鞠智城の修繕の時期にあたります。
「コ」字形配置の建物群は城の管理・
運営を司った中樞施設と考えられ、城内
施設の充実が最も図られ、城としての機

能が十分整ったのがこの時期です。また、
日常生活に用いる土器の出土量が最も多
い時期でもあり、施設の充実が図られる
とともに、城の管理や運営に多くの人員が
配置されたことが推測されます。

出土した土器の大半は須恵器ですが、
これらの須恵器には、福岡県大野城市一帯
の牛頭塚跡群のものや、熊本県宇城市周
辺の宇城窯跡群で製作されたものが認め
られます。また、一部認められる土器に
は陪文と呼ばれる文様が入る畿内系の土
器があることも特徴としてあげられます。

800年
鞠智城を結ぶ(修繕)



■ 土塁

土塁は外部からの敵の侵入を防ぐ城壁
で、鞠智城では城の西側と南側で確認
されています。この土塁は、性質の異なる
土を交互に積み上げて叩き固めるこ
とを何度も繰り返すことで強固な壁を
つくる「版築」という大陸伝来の技術で
築かれています。



■ 八角形建物

(左:八角形建物跡検出状況 右:復元された八角形数層)

平面八角形を呈する八角形建物跡は、建て替えを含め南北2ヵ所から計4棟が見つ
かっており、日本の古代山城では唯一の検出例となります。南側の八角形建物跡は、
心柱を中心に8本の柱が三重に巡る構造をしていました。現在、この南側の八角形
建物跡を、鉄の釘で時を知らせたり見張りをしたりするための3階建ての「鼓樓」と
して復元しています。



(3) 転換期 鞠智城Ⅲ期 (8世紀第1四半期～第3四半期)

転換期

8世紀第1四半期後半

鞠智城Ⅲ期

礎石建物が建てられはじめるなど
建物の様相に変化が見られる。

この時期は、鞠智城の転換期にあたりません。このことは、城の維持・管理に必要な最低限の人員のみを配置するなど、鞠智城における人員配置に変化が生じたためとも考えられます。

礎石建物への構造的な変化は、建物の耐用年数を長くするためと考えられることから、長期にわたる城の存続を意図していたことがうかがえます。しかし、この時期に該当する土器はほとんど出土して

いません。このことは、城の維持・管理に必要な最低限の人員のみを配置するなど、鞠智城における人員配置に変化が生じたためとも考えられます。

また、貯水池跡から出土した荷札木簡はこの時期のものと考えられます。この木簡と同じ形状のものは、大宰府が管轄した西海道^{さいかい道}の範囲や、平城宮跡^{へいけいみやの跡}で出土する西海道関連の木簡にみられることから、鞠智城はこの時期も大宰府の管轄のもとに維持管理がなされていたと考えられます。

750年



■ 49号建物跡
(礎石建物跡)

長者原地区の西側に位置し、鞠智城Ⅲ期に出現する礎石建物です。他の礎石建物よりも規模が大きく、梁行3間(7.2m)、桁行9間(21.6m)の総柱の建物になります。長倉と呼ばれる倉庫であったと考えられています。



■ 63号建物跡
(掘立柱建物跡)

鞠智城Ⅱ期からⅢ期にかけて存在した掘立柱建物跡です。梁行3間(5.85m)、桁行7間(16.8m)の規模を有し、隣接する66号建物跡などと併せて、役所的な機能を有していた建物群であったと考えられています。



■ 木簡

貯水池跡から出土した木簡で、「秦人忍□五斗」という文字が書かれており、秦人忍という人物が税として納めた米に付けられた荷札と考えられています。上部には左右からの切り込みがあり、この形状は九州の木簡によく見られるものです。

(4) 変革期 鞠智城Ⅳ期 (8世紀第4四半期～9世紀第2四半期)

変革期

8世紀第4四半期
9世紀第3四半期

鞠智城Ⅳ期

礎石建物が大型化。食糧等の備蓄施設としての機能が大きくなる。

この時期は、鞠智城の変革期にあたります。長者原地区東側一帯において、鞠智城Ⅲ期の小型礎石を使用した礎石建物から大型礎石を使用した礎石建物への建て替えが行われるなど、建物の大型化が図られており、この時期には、米などを納める倉が多く建ち並んでいたと思われます。また、側柱を掘立柱とする特殊な礎石建物が出現する一方、「コ」字形配置の建物群が消失するなど、建物の構成に大きな変化が生じています。

このような変化は貯水池の構造においても認められ、貯木場を含む池の南側半分が放棄されて埋没が始まるのもこの時期からになります。また、この時期の終わ

り頃には、池ノ尾門の石垣の崩壊も生じているようです。この時期の礎石建物には、多くの礎石に火災痕跡が認められることが特徴としてあげられますが、これは『日本文徳天皇実録』天安2(858)年条の不勳倉11棟の焼失記事との関連が指摘できます。

この時期は、建物構成の変化、貯水池機能の低下など、城の機能が変容した段階であり、特に食糧等の備蓄施設としての役割が大きくなったものと考えられます。また、土器についても、8世紀第4四半期に須恵器が一部に認められるものの、そのほとんどが土師器であり、在地色の強いものとなっています。



■ 鞠智城Ⅳ期の建物
(20号建物跡/米倉として復元)

20号建物跡は、長者原地区の中央部東側から検出された礎石建物跡で、梁行3間(7.2m)、桁行4間(9.6m)の総柱の建物跡です。火災によって焼失した可能性が高く、西側から瓦片が集中的に出土しています。現在、米を保管した「米倉」として建物を復元しています。



米倉に米を選び入れる様子

850年

▲858年

鞠智城周辺の
石垣の崩が自ら燃る
阿曇の不勳倉(米倉)が
11棟焼失する。

イラスト 早川和子 氏

(5) 終末期 鞠智城V期 (9世紀第4四半期～10世紀第3四半期)

終末期

9世紀第4四半期
10世紀第3四半期

鞠智城V期

食糧等の備蓄施設として存続、
しかし、10世紀中頃には城としての役割を終える。

この時期は、鞠智城の終末期にあたり
ます。この時期には、鞠智城IV期に起こっ
た火災による建物の焼失などで城内の礎
石建物数が減少するなど、城の機能が著
しく低下しています。しかし、新たに大型
の礎石建物などが建造されるとともに、
貯水池の北側半分も機能していることか
ら、城が存続していたことがわかります。

この時期に新たに建てられた建物は倉
庫と考えられますが、礎石建物の倉庫が
焼失した後に、大型の礎石建物の倉庫
を建て直していることから、この時期の
鞠智城はIV期に引き続き、倉庫群が建
ち並ぶ食糧等の備蓄施設としての機能

がその役割の中心であったと考えられま
す。廃城時期については、貯水池が完全
に機能を停止する10世紀第3四半期頃と
考えられます。

『日本三代実録』には、元慶3(879)年
に「肥後国菊池郡城院の兵庫の戸がおの
ずから鳴る」という記事があります。この
記事に出てくる「院」は古代の役所などに
付随する大きな建物のことを示します。こ
の菊池郡城院の「院」は、鞠智城V期の
大型礎石建物のことを示しているものか
もれません。この記事が鞠智城に関する
最後の文献記録となり、鞠智城もこのV期
を最後に廃城します。

879年
菊池郡城院の
兵庫の戸が自ら鳴る



不動倉11棟が火災で焼失

950年



鞠智城跡出土の炭化米

鞠智城IV期の米倉と考えられる礎石建物
の周囲からは炭化米が多く出土していま
す。これは、鞠智城の米倉が焼失したとす
る『日本文徳天皇実録』の記載を裏付ける
ものと考えられます。

◎ 鞠智城変遷表

年代	鞠智城の変遷	関連事項
7C	鞠智城Ⅰ期 直立柱建物の建築 城門の構築(深込・壘切・池/瓦門) 貯水池の造成 土塁跡の構築	白村江の敗戦 (663) 防人・持節置、水城築造 (664) 長門国城築城 (665) 大野・榑城築城 (665) 金田・巖崎・高安城築城 (667)
	鞠智城Ⅱ期	大野・基跡・鞠智城築造 (698) 三野・福原城築造 (699) 高安城修繕 (698、699)
8C	建築物の改築	高安城廃城 (701)
	鞠智城Ⅲ期 礎石建物の出現	備後国次城・常城跡める (719)
	鞠智城Ⅳ期 礎石建物の大型化 浴中心部 興築	肥後国が大國に昇格 (795)
9C	礎石建物の大型化	香浜城院、兵庫跡地、不動倉11宇火 (858) 肥後国山本郡設置 (859) 鞠智郡城院、兵庫戸崎 (879)
	鞠智城Ⅴ期 礎石建物の再建	
10C	礎石建物の再建	
	麻城	

◎ 建物の変遷



鞠智城紹介リーフレット『ここまでわかった鞠智城』 - 第6号 -
 『鞠智城の変遷』から転載 平成26年3月

年代	時代	日本全体	熊本	筑後川流域			中国・朝鮮半島
				熊吉層	山鹿層	天志層	
2000年頃	古墳時代	新羅時代に倭国派遣使節					
		C.6世紀 筑前守野原麻呂					
300年	古墳時代						
400年	古墳時代						
500年	古墳時代						
600年	古墳時代						
700年	古墳時代						
800年	古墳時代						
900年	古墳時代						
1000年	平安時代						
1100年	平安時代						
1200年	鎌倉時代						
1300年	室町時代						
1400年	徳川時代						

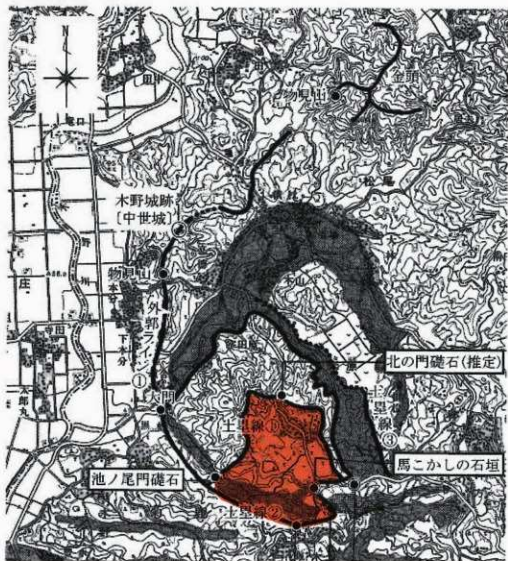
* 新羅百濟古墳の年代層については、近所5世紀後半の巨勢郡山鹿層と併行する、という考え方が出されるようになってきている。この年代層の議論については、今後の調査に待たれるものである。本書ではこれまでの年代層に沿って、5世紀後半に位置付けている。

物智城東京シンゴジム 古代山城鞠智城を考える II 東アジアの中の古代鞠智城
『鞠智城の調査成果』平成22年8月8日 熊本県・熊本県教育委員会 (154-155) より転載

3 これからの鞠智城研究

鞠智城の範囲についての検討

- ・**広域説**は坂本経堯氏が提唱し池の尾門跡から西側にあたる菊鹿盆地に接する位置に地名として残る「大門」を起点に、初田川～中世木野城～金頭にかけて河川と尾根線をつなぐ外郭ラインを想定。
- ・鞠智城では現在まで先学による研究の成果、「広域説」「狭域説（内城域）」が提唱され「真の城域」とも称されている米原台地を囲む内城域のみが、国指定の史跡として保護されている。
- ・史跡指定後も、鞠智城の範囲については最終的には答えは出ておらず、指定地外での予備調査も実施されていないのが現状。「完全なる鞠智城域の決定すら未だ確定したとはいえない現状であることを忘れてはならない」（小田 2012）の指摘を踏まえた予備調査が必要である。



熊本県教育委員会『鞠智城跡Ⅱ』熊本県文化財調査報告第276集 2012より転載

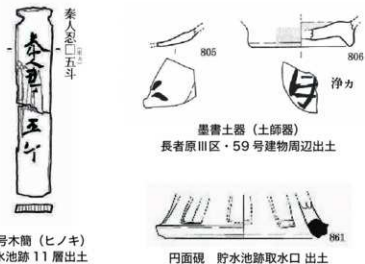
赤色範囲が現在の史跡指定範囲

(2) 鞠智城に関連する周辺遺跡の研究



鞠智城と同時期に存在したと考える官衙・集落遺跡
 『鞠智城の調査成果』2010より転載

(3) 鞠智城出土文字史料と菊池郡内の墨書土器等研究



1号木簡 (ヒノキ)
 貯水池跡 11層出土

円面硯 貯水池跡取水口出土

鞠智城跡出土文字資料 『鞠智城Ⅱ』2012より転載

参考文献

- ・小田富士雄「古代九州の」とくに都城制型山城の設定をめぐる - 『古代九州と東アジアⅡ』 同成社
- ・小田富士雄「熊本県・鞠智城跡をめぐる諸問題」『古代九州と東アジアⅡ』 同成社
- ・小田富士雄「鞠智城創設考」『古代九州と東アジアⅡ』 同成社
- ・小田富士雄「回顧・大宰府史跡の調査研究（上）」『古文化談叢』第89集 九州古文化研究会 2024
- ・小田富士雄「回顧・大宰府史跡の調査研究（下）」『古文化談叢』第90集 九州古文化研究会 2024
- ・佐藤 信「出土資料の古代史」東京大学出版会 2002
- ・吉村武彦・加藤友康・川尻秋生・中村友一編『墨書土器と文字瓦』 - 出土文字史料の研究 - 八木書店 2023
- ・日野尚志「古代の官道」『鞠智城とその時代』 - 平成 14 年～ 21 年度「館長講座」の記録 歴史公園鞠智城・温故創生館 2011 年3月
- ・木本雅康「鞠智城西南部の古代官道について」『鞠智城跡Ⅱ』 - 論考編1- 熊本県教育委員会 2014 年3月
- ・2009 東京シンポジウムの記録「古代山城鞠智城を考える」笹山晴生監修 山川出版社
- ・鞠智城紹介リーフレット『ここまでわ朝鮮式山城新考かった鞠智城』 - 第6号 - 平成 26 年3月
- ・鞠智城 東京シンポジウム 古代山城鞠智城を考えるⅡ 東アジアの中の古代鞠智城『鞠智城の調査成果』平成 22 年8月8日
熊本県・熊本県教育委員会
- ・くまもと文学・歴史館「文字が語る古代のくまもと」令和6年（2024年）3月15日
- ・熊本県「鞠智城周辺ゆるやかな公園基本計画検討業務に係わる発掘調査」平成 27 年（2015 年）7月
- ・熊本県教育委員会「上鶴頭遺跡」熊本県文化財調査報告第 63 集 1983
- ・熊本県教育委員会「鞠智城跡Ⅱ」熊本県文化財調査報告第 276 集 2012
- ・熊本県教育委員会「赤星石道遺跡・赤星灰塚遺跡」熊本県文化財調査報告第 339 集 2020
- ・菊池市教育委員会「医者どん坂遺跡」菊池市文化財調査報告第 11 集 2022

筑紫大宰の備え

小嶋 篤（九州歴史資料館 技術主査）

はじめに

「筑紫國者、元戎邊賊之難也。其峻城深陁臨海守者、豈爲内賊耶・・・(後略)」

(『日本書記』卷第二八 天武天皇紀上)

<現代語訳>

筑紫国は以前から辺賊の難に備えている。そもそも城を高くし、溝を深くし、海に臨んで守るのは内の賊のためではない。・・・(後略)

壬申の乱(672年)勃発時、近江朝は筑紫大宰・栗隈王に対し軍事動員要請を行った。上記の『日本書記』引用記事は、筑紫大宰の返答として国史に記載された栗隈王の発言である。

本記事からは、「①筑紫大宰が筑紫国の軍事動員機構を管轄していたこと」が把握でき、かつ「②古代山城等の軍事施設を管轄していたこと」もわかかわせる¹⁾。本発表では、朝鮮半島での軍事衝突が続いていた時代(676年 伐伐浦の戦い(羅唐戦争)以前)における防衛体制、すなわち「筑紫大宰の備え」について「Ⅰ:施設、Ⅱ:軍隊、Ⅲ:兵器、Ⅳ:戦術、Ⅴ:戦略」という体系的視点から把握を試みる。

1. 施設-大野城の築城・整備・維持-

(1) 大野城跡の資料的優位性

「筑紫大宰の備え」の学術的追究では、古代山城研究(歴史学)の原点とも言える年代決定が起点となる。筑紫国最大の古代山城である大野城は、50年以上の調査蓄積があり、複数地点の豊富な出土遺物から築城・整備・廃絶時期等について検討できる。

(2) 大野城跡出土土器の総量分析

大野城と四王院 文献史料に基づくと、大野城城内には「四王院」という寺院が774年に創建されている(『類聚三代格』宝亀五年三月三日官符)。そして、四王院に起因すると見られる地名「毘沙門天・広目天・増長天・持国天」が四王寺山山中に分散する。つまり、大野城跡と四王院跡は重複関係にあり、774年以降の遺物には大野城と四王院の帰属遺物が複合する(図1)。

豊富な出土土器 大野城跡・四王院跡出土土器の総量は、4,101点(九州歴史資料館所蔵品のみ)にも及ぶ(吉田他 2022)。本点数は土器片の点数であり、土器の個体数と直結せず、同一個体の破片も内包する可能性が高い。しかし、各地点に遺存する土器量、すなわち人為痕跡の濃淡のうち、人為痕跡が濃厚な地点の時間軸把握には有効な数量である。土器出土数量は、四王寺山の最高所である大城山山頂(標高410m)を内包する「毘沙門天地区」が3,514点と突出して多く、全体の85%以上を占める。大野城を構成する倉庫群・城門を主体とする地区では、八ツ波地区(339点)、太宰府口地区(186点)が出土点数の多い地点となる。「館」銘墨書土器・文様磚が出土する等、大野城の管理棟があると目される主城原地区の土器出土量は42点である。

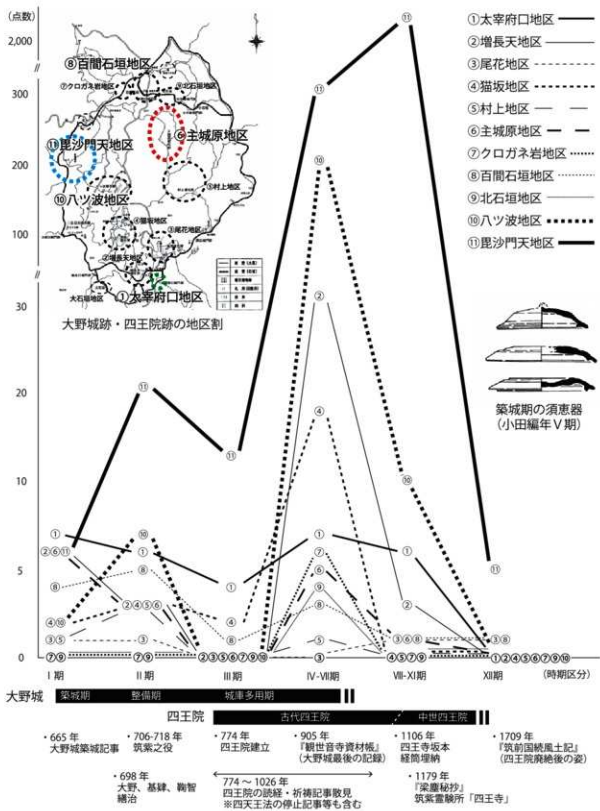


図1 大野城跡・四王院跡出土土器の数的推移 (九州歴史資料館所蔵品のみ)

大野城帰属遺物の様相 四王院建立は774年であるため、8世紀前半以前の遺物は基本的に大野城帰属遺物と見なしてよい。とくに、大野城築城と関わる遺物としては、主城原地区出土須恵器が注目できる。本須恵器群には、白村江の戦い(663年)前後に用いられた須恵器坏蓋(小田編年V期)が含まれる。また、後統型式の須恵器は主城原地区だけでなく、太宰府口城門地区や大石垣地区等の大野城各所で見出すことができる。大野城内の最高所(大城山山頂)で水城と尾根依いに接続する毘沙門天地区は、軍事機能の要所となっていたと見られ、出土土器量が多い。また、4,101点の土器に飛鳥時代前半(小田編年VB期以前)の土器が1点も確認できない点は重視でき、小田編年V期の遺物量が少ないとは言え、存在すること自体に高い資料的価値が認められる。整備期と評価できる大野城II期は、緒治(698年)・筑紫之役(706～718年)と重なり、遺物量が増加する。整備が一段落した後の遺物量は、大野城全体で減少する。

(3) 大野城と鞠智城

再整備型古代山城 古代山城は土地利用変遷から「再整備型」と「新規築城型」の二相に分類できる(木村2016)。鞠智城跡は古墳時代集落と重複することから、古代山城築城以前の遺物が多数出土する。土器出土量は築城期(7世紀第3四半期)に微増し、整備期(698年、緒治)に増加する(木村2016)。本分析結果は、鞠智城において「緒治(698年)」が重要な画期であることを示すが、遊離資料を中心に築城期遺物の帰属が問題となる。

新規築城型古代山城 大野城跡は土塁や倉庫群が建設された尾根上に古墳時代集落・墓域が営まれていない「新規築城型」であることから、最古相の出土土器(小田編年V期)がより鋭敏に古代山城築城の時期(7世紀第3四半期)を反映していると評価できる。

整備後の古代山城 大野城と鞠智城の比較では、「緒治」・「筑紫之役」による土器量増加とともに、城庫多用期と見られる奈良時代(8世紀中頃)の土器量減少も共通する。古代山城整備時には多くの整備資材・人員が城内に入るが、整備後の運用初期においては、城庫とその周辺は守衛対象として厳密に管理されていたと解釈できる。

(4) 国家が重要視した古代山城の築城年代

大野城の築城時期が小田編年V期にあることを確認した。小田編年V期はおおむね7世紀第3四半期の暦年代比定がなされているが、土器の型式編年のみでは、築城年代を白村江の戦い(663年)よりも「前か、後か」を決定することはできない。現状の資料で踏み込めば、大野城I期の土器群は小田編年VB期の土器を含まないことから、小田編年V期でも新相に位置づけられる。したがって、筆者は大野城の築城年代は、百済救援戦争(660～663年)を上限とする「後出説」を支持する。

2. 軍隊・兵器・戦術-国造軍と備蓄兵器-

(1) 軍事動員機構の変遷

孝徳紀天下立評 評制の施行(645～654年頃)により、地方支配体制は「国造—評造—五〇戸造」に編成された(篠川1985)。国造のクニ内部には、国造の直轄集団のほか、地方伴部等の豪族や、これらに任命されていない豪族が存在した。筑紫の場合は、筑紫国造の直轄地は八女領域、地方伴部としては春米部や大神部等が福岡平野周辺に分布が認められ、非任命の豪族では胸肩君が宗像領域(神郡母体)を形成していた。評制はこれら諸集団を評という統一組織にまとめ、奉仕義務をもたなかった集団にも一律の賦役を課した。

国造制と評制は重複関係にあり、評制下においても「国造には、クニ内部のすべての評を統括する役割や、評の範囲を超える貢納・奉仕における役割が期待され、義務づけられた」ことが有力視されている(篠川 2021)。軍事動員も戸(徴兵単位としての五十戸制)を単位として、クニ内部の一時的負担となるよう改変されたが、部隊運用においては国造が引き続き指揮権を担う構造を維持した【II-1期国造軍】(図2)。天下立評の痕跡は「評衛遺跡」としては現れず、現象としては大型方墳・円墳の築造停止(小田編年IVB期)が肯定でき、軍事力と直結する豪族の私的動員抑止が同時多発的に広域で認められる(制限法としての「薄葬令」)。

筑紫国造軍の渡海 百済救援戦争(661～663年)では、古墳時代後期後半の開発地拡大・人口増加と、天下立評による労役体系・兵器消費と保管の改変を経て蓄えられた人的資源・物資が朝鮮半島に投下された。同戦役では宮自体が筑紫に西下し、国造軍の動員・差配を担った【II-2期国造軍】。筑紫国造軍は戦役の初期段階(661年)に渡海しており、白村江の戦い(663年)以前に筑紫君薩野馬・大伴部博麻(上妻評居住)は唐軍の捕虜になっている。同じく、捕虜となっていた筑紫三宅連得許はミヤケの管掌氏族、韓嶋勝婆婆は豊(後の豊前国宇佐郡辛島郷)の豪族であり、筑紫洲各地の国造軍が動員されている(酒井 2018)。

(2) 古代山城と国造軍

国造軍の駐屯期間 百済救援戦争直後に築城記事が集中する古代山城の威容は、『日本書紀』に記載された白村江の戦いの動員兵数約 47,000 人に信憑性を抱かせる。当該期における大規模労役を可能とする動員体系は「国造一評造一五〇戸造」編成であり、同動員により筑紫に集結していたのが国造軍である。国造軍の筑紫集結期間は、少なくとも斉明天皇七年三月二五日(斉明天皇、那津到着)から天智天皇二年三月の派兵にいたる約二年間におよぶ。その間に三回の大規模派兵がなされ、集結兵数の増減は著しいが、宮自体が筑紫(那津・朝倉)に西下した状態にあることから、天智天皇二年後も一定数の守衛部隊が駐屯状態にあったと見る。また、白村江の敗戦を経て、帰国した国造軍を直ちに解散させたとは考え難く、帰郷に向けた部隊の再編成も兼ねつつ、唐・新羅の動勢把握までは、対馬・志岐・筑紫での駐屯を継続したと考えられる。つまり、上記兵役期間に古代山城の築城(労役)にも国造軍が動員されたことで、平時とは異なる「戦時」での短期間かつ大規模な労役が可能になったと考える(小嶋 2024)。また、対馬という離島に位置し、城郭としての完成度が高い金田城の築城動員は、島外からの新規徴発に多大な労力がかかるため、対馬での国造軍駐屯期間に築城が開始されたことが有力視できる。上記見解は、古代山城築城のための新規徴発を否定するものではなく、両動員の重複と認識する。

国境画定と国造制廃止 天武天皇一二～一四年(683～685年)の国境画定事業「令制国の成立」により、国造制は廃止される(篠川 1985)。筑紫君も本拠地である上陽群・下陽群評の評造を帯するのみとなったと想定される(酒井 2021)。次いで、天武天皇一四年の武器取公により、「大角・小角・鼓・吹・幡旗」の指揮具について私家での保管が禁じられ、すべて郡家(評衛)に収めることが義務づけられた(下向井 1991)。本詔は国造制廃止決定時に発せられたものであり、ここでの私家とは「国造の居宅」を指すとの指摘がある(篠川 2018)。指揮具の取公を物理的に実現するものが評衛(評衛)であり、天武天皇一四年には「遺跡」としての評衛の存在が確認できる。上記をふまえると、国造制廃止以前においては、指揮具・大型兵器の運用は国造が担っていたと把握でき、百済救援戦争や天智紀の防衛体制下では国造軍が維持されたと理解できる。国造制廃止・武器取公をもって、国造軍は終焉したと識別する。

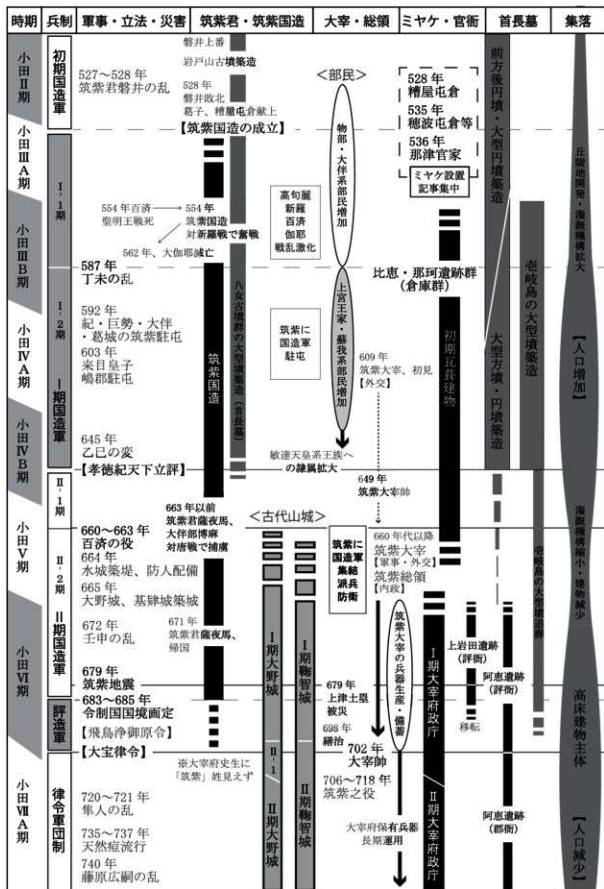


図2 国造軍の変遷と筑紫島の動態

(3) 国造軍の戦術

『日本書紀』に見る合理的思考 『日本書紀』は天武朝から編纂が開始され、『続日本紀』養老四年(720年)五月二二日の『日本紀』奏上の記事で完成日時が確認できる。本書は編纂時における社会的習慣・合理的解釈・文章表現が、意識的・無意識的に反映されている。恣意的編纂もなされているが、古代山城と同時代の歴史書である点は重要であり、同時代人の戦術に対する合理的思考を探る上での基本文献となる。

『日本書紀』記載の集団戦闘 『日本書紀』記載の集団戦闘を分類すると、その形態は「①防衛施設の包圍(焼き討ち)」、「②交通路の封鎖」、「③会戦・陣地戦」、「④突撃・追撃」、「⑤奇襲(夜襲)・伏兵」に大別できる(小嶋 2016b)。

戦時下の古代山城運用事例として、壬申の乱における三尾城と高安城の二つの城の記述が注目できる。前者の三尾城は記載が簡素なために、戦闘の詳細は不明である。同日に瀬田橋の戦いの勝敗が決しており、大友皇子を中心とする近江軍の主力は瀬田橋西岸に着陣していた。つまり、近江軍は龍城ではなく、交通路封鎖による会戦での決戦を図った。高安城は、奈良盆地と大阪平野に挟まれた高安山に築かれた古代山城である。壬申の乱における大和・河内の戦場は、奈良山や飛鳥上道・中道・下道等で展開しており、三尾城と同様に主戦場として利用されていない。大伴吹負が河内からの近江軍の侵攻を防ぐにあたり、重要視したのは交通路の封鎖であり、大和への進入路に各軍勢を配していた。高安城は竜田の封鎖に向かった坂本臣財らにより攻略されているが、同員数は最大でも300名と少ない。また、近江軍は坂本臣財らと交戦する前に逃散しており、不確実ながら守衛していた近江軍の兵数も少数であったと想定できる。注目すべきは、高安城を占拠した坂本臣財の対応であり、城内からの眺望により河内方面の近江軍の動向を把握し、近江軍の迎撃へと向かっている点である。高所からの軍勢把握は、古代山城を利用した基本戦術であったことが分かる。

(4) 筑紫大宰の兵器生産と備蓄兵器

素材と生産 古代山城・国造軍の運用における必要物資が「兵器」である。『日本書紀』天武天皇一四年(685年)一一月に筑紫大宰への兵器素材(鉄一万斤・箭竹二千本)輸送が記載されている。当該期は「筑紫大宰の府」である大宰府政庁I期官衙の整備が進められた時期であり、政庁西部(蔵司丘陵周辺)には異業種複合の冶金工房群が展開していた(図3)。これらの工房群は筑紫大宰管轄下であり、官衙建設・調度品生産だけでなく、要請に応じて兵器生産にも従事した可能性が高い(小嶋 2016a)。

兵庫保管物 大宰府政庁西隣・蔵司地区の調査研究により、藤原純友の大宰府襲撃時(941年)に焼失したと見られる兵庫保管物が大量に出土した。現在までの被熱鉄製品・鉄塊の総重量は約195kgで、およそ矢束206具(10,346隻)、小札甲2~5領(小札3,920枚)に相当する。被熱鉄製品で最も数量の多いものが矢根系長頸鎌である。矢柄留めは、鍔筥被が1,912個体で全体の九割以上を占める。鍔筥被は古墳時代後期(6世紀)に普及し、飛鳥時代(7世紀)まで採用された形態である。矢と対になる弓も備蓄が認められ、98個体にもおよぶ両頭金具が出土した。両頭金具も古墳時代後期(6世紀)に普及した弓金具であり、飛鳥時代(7世紀)まで日本各地で出土するが、奈良時代以降の出土品はこれまで未確認であった。小札甲を中心に奈良時代以降の製品も補充されているが、大宰府備蓄兵器の数的確保は、百濟救援戦争以後の筑紫大宰下で実現されたことが明らかである。



大宰府政庁Ⅰ期並行の工房残滓
(蔵司・不丁地区)

被熱した兵庫屋根瓦と兵庫保管物
(蔵司地区)

大宰府政庁周辺官衙跡（蔵司地区）出土被熱遺物の位置づけ

時期	甲冑	弓矢	蔵司地区出土被熱遺物				武器様式	兵庫管理
7c 後半	小札幅縮小	鍔籠被主体	【小札】	【両頭金具】 98点	【鍔籠被】 1,912点	【筒籠被】	古代武器様式 1段階	筑紫大宰
8c 前半	綿襖甲出現	両頭金具消滅 筒籠被主体				138点		
8c 後半	小札二枚重ね出現 革甲出現	鍔籠被消滅					大宰府 ※大宰府廃止時は筑前国	
9c 前半	第3威孔消滅					古代武器様式 2段階		
9c 後半	星兜の上限	籠被短化 鏑矢変化 柳葉Ⅰ式出現	星兜含まない					柳葉Ⅰ式含まない
10c 前半 承平・天慶の乱 (941年、大宰府襲撃)							
10c 後半	星兜定式化指向 二行十三孔小札 大鎧出現	警根Ⅰ式出現	二行十三孔小札 ・大鎧含まない		警根Ⅰ式含まない	初期中世 武器様式 1段階	蔵司丘陵の 兵庫焼失	
11c	星兜定式化					初期中世 武器様式 2段階		
12c	中世組成 (柳葉Ⅰ式 ・警根Ⅰ式・雁又式) の完成				中世組成含まない			

※様式設定は津野仁 2015「日本古代の軍事武装と系圖」、小嶋篤 2016「大宰府の軍備に関する考古学的研究」より引用

図3 筑紫大宰の兵器生産と備蓄兵器

3. 戦略-筑紫大宰の城塞群-

(1) 行軍路

国造軍を運用した戦術において、多用されたのは「交通路の封鎖-陣地戦・会戦」である。古代山城群に先んじて記載される水城(664年)は、国造軍運用からも理にかなった施設である。水城が封鎖した南北路は、那津と筑紫平野を結ぶ最重要幹線路であり、九州内陸部の国造軍は本路を通して朝鮮半島への外征を繰り返してきた。この南北路を主戦場として、地勢的優位性を保ちつつ、兵站維持を図ることが城塞群の基本戦略であったと考えられる。

(2) 二日市地峡帯の地勢と戦闘単位

二日市地峡帯における国造軍運用を念頭に、地勢に基づいて戦闘単位を抽出する。以下では、主要地区(※図4地区番号と記述地区番号対応)についてのみ記述する。

①水城前面 外敵襲来時の主戦場。東西二つの主要南北路がある平地部で、外敵側も陣地展開が可能である。中央の御笠川により東西に細分でき、東は大野城、西は牛頭丘陵群(小水城群)により鶴翼状に陣地戦が展開できる。なお、藤原純友による大宰府襲撃時も同地が戦場となっている。

②大野城山麓 大野城(四王寺山)の裾には、古墳時代より利用されてきた「山裾路」が四方を巡る。行軍は可能だが、大野城眼下で部隊が間延びしてしまうため、外敵側は大規模行軍に向かない。大野城外郭に設置された多くの城門は、これら山裾路や主要登城路側面での対処的部隊展開を図る施設と捉えられる。

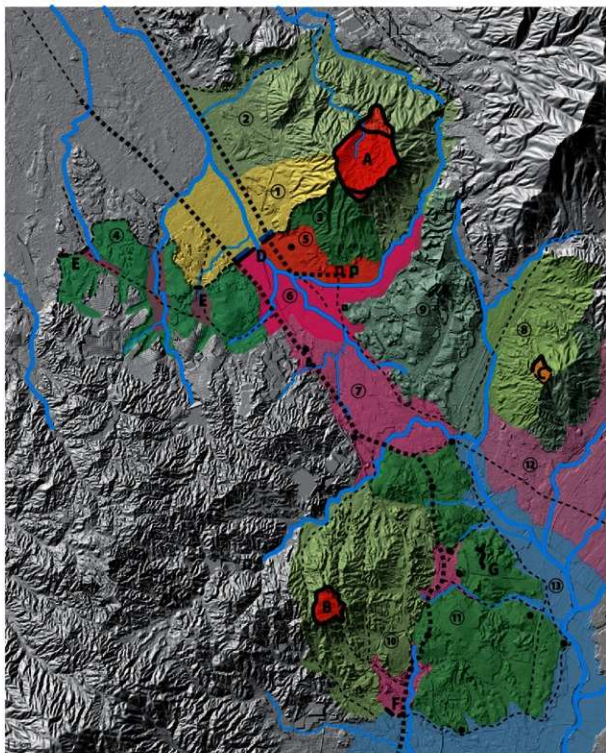
③官衙後背 大野城山麓でも官衙との接続路が複数あり、官衙側への部隊展開が可能。

④小水城群 古墳時代より須恵器・鉄生産の燃料林に用いられた丘陵群であり、低草木化が進行していた。物資搬出路が整備され、かつ見通しのよい高所に面的な陣地構築が可能のため、水城運用のためにも城塞群に取り込まざるを得ない場所であった。

⑤官衙城 水城・大野城・御笠川により四方を囲まれた筑紫大宰の官衙城。東端には建設途中の観世音寺がある。

⑥・⑦地峡部中央部 谷底から離れた山裾側に二つの南北路が走る。「日本書紀」記載の古代寺院は防衛拠点への転用例が多く、同地では塔原廃寺や般若寺がある。

⑩・⑪基肆城山麓と三国丘陵周辺 基肆城築城時に新設された「城山道」、筑紫神が坐す「鞍轡尽しの坂」、丘陵群辺縁の山裾路の三つの南北路が縦走する。「鞍轡尽しの坂」は国造軍動員路として古墳時代より機能してきた南北路であり、丘陵群の関門として、関屋土塁・とうれぎ土塁による閉塞がなされる。基肆城が睥睨する丘陵群は開析谷が入り乱れており、行軍路に限られる同地は、速やかな部隊展開が戦局を左右する。本視点で眺めると、新たに発見された前畑土塁は外郭土塁(城壁)と捉えるよりも、尾根線を利用した丘陵群上の部隊展開路と見た方がよい。



【古代山城】A：大野城 B：基肆城 C：阿志岐古代山城

【土塁】D：水城 E：小水城 F：関屋・とうれぎ土塁 G：前畑土塁

図4 筑紫大宰体制下の防衛設計

おわりに

「筑紫大宰の備え」について、体系的な視点から把握を試みた。二日市地峡帯に築かれた城塞群は、古墳時代後期より累代的に整備されてきた侵攻体制（国造軍動員方式）上に存在する。本城塞群を軍事的に機能させるには、相当数の軍事動員を見込む必要があるが、常備軍として駐屯していたとは考え難く、非常時にあわせて国造軍を集結させる計画であったと考える方が現実的である。情報伝達・行軍速度・物資運搬能力に限界がある近世以前において、城塞群の戦線を維持するには、筑紫国造をはじめとする九州内部の諸豪族を「軍隊」として機能させることが必須であり、本構造を物理的に支えたものが筑紫・火を貫く南北路であった（小嶋 2021）。

後に「大宰府外郭線」を構成する城塞群は、日本列島で唯一戦術単位での連携が可能な古代山城群であり、「辺賊の難」に備えた要地として「筑紫大宰」が常駐した。他の古代山城は戦略単位での連携は認められるが、城内を基点とした部隊展開距離を鑑みると、戦術単位での連携は難しい。九州北部に分散する古代山城は、外敵による現地での兵站確保（評倉保管物の取奪等）を阻害するとともに、各国造軍の「遊兵」化（戦場離脱・逃散）を抑止し、「死兵」として用いるための軍事動員基点と考える。情報伝達能力の限界を補填するには、常時は分散する各国造軍の対処的動員力維持が重要である。

<註>

註1：大野城・基肄城・鞠智城の統治は大宰府が管轄しており、筑紫大宰体制下も同様であったと考えられる。

註2：防人は古代山城運用のような防衛戦争を担うものではなく、敵軍を確認し、烽等を用いて早期の国造軍展開に向けた情報収集・伝達を図ることが当初の主要任務であったと考える。

<参考文献>

- 小田富士雄編・共著 2018 「特集 西日本の「天智紀」山城」『季刊考古学』第 136 集 雄山閣
- 木村龍生 2016 「土器の様相から見た古代山城」『築城技術と遺物から見た古代山城』熊本県教育委員会
- 小嶋篤 2016a 「大宰府の軍備に関する考古学的研究」平成二五～二七年度科学研究費助成事業若手研究（B）研究成果報告書 九州国立博物館・福岡県立アジア文化交流センター
- 小嶋篤 2016b 「兵器の様相から見た古代山城」『築城技術と遺物から見た古代山城』熊本県教育委員会
- 小嶋篤 2021 「火国の領域設定と鞠智城」『鞠智城と古代社会』第 9 号 熊本県教育委員会
- 小嶋篤 2024 「国造軍と鞠智城」『鞠智城と古代社会』第 12 号 熊本県教育委員会
- 酒井芳司 2018 「筑紫国造と評の成立」『大宰府の研究』高志書院
- 酒井芳司 2021 「九州北部の豪族と筑紫大宰」『大宰府史跡指定一〇〇年と研究の歩み』九州国立博物館アジア文化交流センター研究論集第二集 九州国立博物館
- 下向井龍彦 1991 「日本律令軍制の形成過程」『史学雑誌』100-6 公益財団法人史学会
- 藤川賢 1985 「国造制の成立と展開」吉田弘文館
- 藤川賢 2021 「国造・大和政権と地方豪族」中央公社
- 吉田東明・蓮村真之・宮地聡一郎・小嶋篤 2022 「大野城跡・四王院跡出土土器の総量分析」『大宰府四王院』九州国立博物館



鞠智城シンポジウムの過去の発表要旨や成果報告は、奈良文化財研究所が運営するホームページ「全国遺跡報告総覧」から無料ダウンロードできます。

全国遺跡報告総覧

検索

<https://sitereports.nabunken.go.jp/ja>



鞠智城シンポジウム発表要旨 2024

大宰府と古代山城・鞠智城

発行年月日 令和6年(2024年)10月27日

編集 歴史公園鞠智城・温故創生館
〒861-0425 熊本県山鹿市菊鹿町米原443-1

発行 熊本県教育委員会
〒862-8609 熊本県熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

印刷 株式会社アド・コム
〒862-0908 熊本県熊本市東区新生2丁目23-18

表紙写真：令和5年度鞠智城フォトコンテストグランプリ「桜花爛漫の城」 川上和臣



I はじめに・コメント

II 白村江敗戦以降の国内動向

一 百済からの渡航・移住と唐使の来日

1 日本への渡航

- ① 天智2年8月28日 日本・百済軍が白村江の戦いで敗戦
 ② 天智2年9月24日 日本の船師、及び佐平余自信・達率木素貴子・谷那晋首・憶礼福留、并て国民等、弓礼城に至る。明日、船発ちて始めて日本に向ふ。

(参考) 天智10年正月 [授位]

- * 大錦下(従4位) 佐平余自信、沙宅紹明(法官大輔)
 * 小錦下(従5位) 鬼室集斯(学職頭)
 * 大山下(従6位) 達率谷那晋首・木素貴子・憶礼福留・答お春初(以上兵法)、
 お日比子贊波羅金羅金須・鬼室集信(以上業)
 * 小山上(正7位) 達率徳頂上・吉大尚(以上業)、許率母(五経)、角福牟(陰陽)
 * 小山下(従7位) 余の達率等 50余人

2 郭務棕の来日(筑紫に滞在)

- ① 天智3年5月17日 百済の鎮将劉仁願、朝散大夫郭務棕等を遣して、表面と献物とを進る。
 ② 天智3年10月1日 郭務棕等を発て遣す勅を宣たまふ。是の日に、中臣内臣、沙門智祥を(大宰府に)遣して、物を郭務棕に賜ふ。
 ③ 10月4日 郭務棕等に饗賜ふ。
 ④ 天智3年12月12日 郭務棕等罷り帰りぬ。

3 劉徳高等の来日(飛鳥)

- ① 天智4年9月23日 唐国、朝散大夫沂州司馬上柱国劉徳高等を遣す。(等といふは、右戎衛郎將上柱国百済福羅・朝散大夫柱国郭務棕を謂ふ。凡て254人。
 7月28日に、対馬。9月20日に、筑紫。22日に、表面を進る)
 ② 天智4年10月11日 大きに菟道に關す。
 ③ 天智4年11月13日 劉徳高等に饗賜ふ。
 ④ 11月 劉徳高等罷り帰りぬ。

4 遣唐使の派遣

- * 天智4年 小錦守君大石等を大唐に遣すと、云云。(等といふは、小山坂合部連石積・大乙吉士岐弥・吉士針間を謂ふ。蓋し唐の使人を送るか)。

二 国内改革

1 氏の再編・序列化

(1) 甲子の宣(天智3年2月9日) - 対氏族政策

* 天皇、大皇弟に命じて、①冠位の階名を増し換ふること、②及び氏上・民部・家部等の事を宣ふ。其の冠は二十六階有り。(略) 其の大氏の氏上には大刀を賜ふ。小氏の氏上には小刀を賜ふ。其の伴造等の氏上には干楯・弓矢を賜ふ。また其の民部・家部を定む。

⇒ 大氏・小氏・伴造等氏と、氏上・民部・家部の設定

(参考) 天武4年2月15日

* 甲子の年に諸氏に給へりし部曲は、今より以後、皆除めよ。

⇒ 白村江の敗戦以降の国内改革として捉える必要がある。

位階・氏を取りあげている。「民部・家部」論を独立させるのは疑問。

(2) 八色の姓(天武13年10月己卯条)

* また諸氏の族姓を改めて、八色の姓を作りて、天下の万姓を混す。一つに曰はく、真人。二つに曰はく、朝臣。三つに曰はく、宿祢。四つに曰はく、忌寸。五つに曰はく、道師。六つに曰はく、臣。七つに曰はく、連。八つに曰はく、稻置。

* 『古語拾遺』

・ 大氏(朝臣)、小氏(宿祢)、伴造氏(忌寸か)

⇒ 氏の序列化が進む。

(3) 従来の氏の扱い

① 姓の配列

* 大化2年8月条 (p300)

・ 卿大夫・臣・連・伴造・氏氏の人等、(或本に云はく、名名の王民といふ)。咸に聴聞るべし。

② 將軍と氏氏

* 崇峻4年11月壬午条

・ 紀麻呂宿祢・巨勢猿臣・大伴嚙連・葛城烏奈良臣を差して、大將軍とす。氏氏の臣連を率て、裨將・部隊として、二万余の軍を領て、筑紫に出で居る。

(参考) 推古10年2月己酉条

* 來目皇子をもて新羅を撃つ將軍とす。諸の神部及び国造・伴造等、并て軍衆二万五千人を授く。

* 天智即位前紀 百濟救援軍 前將軍・後將軍

※ 百濟救援軍 天智2年3月・6月 前・中・後將軍 2万7千人

⇒ 戦いでは、將軍が氏氏を引率したか?

③ 氏と眷屬

* 舒明即位前紀

・ 是の時に適りて、蘇我氏の諸族等悉に集ひて、島大臣の為に墓を造りて、墓所に次れり。

* (天武11年12月壬戌条)

・諸氏の人等、各々氏上に可き者を定めて申し送れ。亦其の眷族多に在らむ者をば、分けて各氏上を定めよ。並に官司に申せ。

2 渡来系移住民

(1) 百済官位を日本官位に換算

* 天智4年2月 百済国の官位の階級を勘校ふ。

(2) 近江国への移住

* 天智4年2月是月条

・復、百済の百姓男女400余人を以て、近江国の神前郡に居く。[翌月に給田]

3 西日本防衛体制の構築

(1) 防人・烽火と水城

* 天智3年是歳 対馬島・壱岐島・筑紫国等に、防と烽とを置く。

又筑紫に、大堤を築きて水を貯へしむ。名けて水城と曰ふ。

(2) 朝鮮式山城の築城など

① 『日本書紀』天智4年8月条

* 達率答む春初を遣して、城を長門国に築かしむ。達率憶礼福留・達率四比福夫を筑紫国に遣して、大野及び椴(基肆)二城を築かしむ。

② 天智6年3月条

* 近江遷都。

③ 天智6年11月是月条

* 大和国の高安城、讃吉国山田郡の屋島城、対馬国の金田城を築く。

④ 天智8年8月条/冬条

* 天皇、高安嶺に登りまして、議りて城を修めむとす。なお、民の疲れたるを恤みたまひて、止めて作りたまはず。/高安城を修りて、畿内の田税を収む。

⑤ 天智9年2月条

* 又、高安城を修りて、穀と塩とを積む。又、長門城一つ・筑紫城二つを築く(重出説)。

⑥ 天武元年6月条

* 筑紫国は、元より辺賊の難を成る。其れ城を峻くし隍を深くして、海に臨みて守らするは、豈内賊の為ならむや。

⑦ 天武8年11月是月条

* 初めて関を竜田山・大坂山に置く。よりに難波に羅城を築く。

⑧ 『続日本紀』文武2年5月条

* 大宰府をして大野・基肆・鞠智の三城を繕治わしむ。

⑨ 文武3年12月条

* 大宰府をして三野・稲積の二城を修らしむ。

三 筑紫大宰（府）

1 筑紫大宰・大宰府

- * 推古17年4月 筑紫大宰、奏上して言さく、(略)
- * 皇極2年4月 筑紫大宰、馳驛して奏して曰さく、(略)
- 6月 筑紫大宰、馳驛して奏して曰さく、(略)
- * 大化5年3月 (蘇我)日向臣を筑紫大宰師
- * 斉明朝 筑紫大宰帥大錦上(阿倍)比羅夫(『続日本紀』)
- * 天智7年7月 筑紫率 栗前(栗隈)王
- * 天智8年正月 蘇我赤兄 筑紫率
- * 天智10年6月 筑紫率 栗隈王
- * 11月 対馬国司、使を筑紫大宰府に遣して言さく、(略)
- * 天武元年6月 筑紫大宰 栗隈王

2 大宰府と山城

- * 天智4年8月 達率億礼福留・達率四比福夫を筑紫国に遣して、大野及び椽(基肄)二城を築かしむ。
- * 天智9年2月 筑紫城二つを築く。(重出説)
- * 文武2年5月 大宰府をして大野・基肄・鞠智の三城を繕治わしむ。
- * 文武3年12月 大宰府をして三野・稲積の二城を修らしむ。

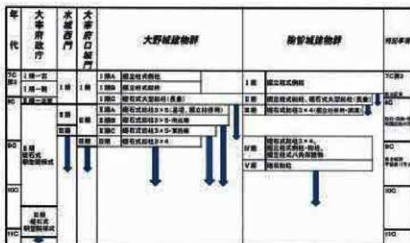
III 今後の課題

1 大宰府の機能・役割と構造

- * 大宰府政庁と防御施設等の配置計画と造営時期
 - ・『書紀』には城柵の建設以外、後の二官八省や大宰・令制国の設置記事がない。

2 考古学の発掘調査への期待

- * 水城、大野城・基肄城、大宰府政庁と鞠智城の築城時期
 - ・諸施設の造営・技術と労働力編成、大宰府と鞠智城の関係



赤司善彦「大宰府と古代山城」(『雷山神龍石と怡土城』糸島市、2024)

この電子書籍は、大宰府と古代山城・鞠智城 鞠智城シンポジウム発表要旨 2024 を底本として作成しました。

なお、巻末に当日配付資料：吉村武彦「大宰府と古代山城・鞠智城」へのコメント を付しています。

書名：大宰府と古代山城・鞠智城

鞠智城シンポジウム発表要旨 2024

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話：096-383-1111

URL：<http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：西暦 2024 年 10 月 31 日